HIGASHI ASIA13'

|2013年10月～2014年9月|

東アジア教員養成国際コンソーシアム

学生相互交流プログラム

研修レポート集

日本学生支援機構(JASSO)平成２５年度

留学生交流支援制度(短期受入れ)採択課題

東京学芸大学国際戦略推進本部

東アジア教員養成国際コンソーシアム学生相互交流プログラム
研修レポート集
目　次

はじめに
（長谷川　正）…… 3
東アジア的「学びの共同体」と「教学相長」
（岩田　康之）…… 5
〔研修レポート〕
遊びに関する日本幼稚園の教師と保護者の認識比較研究
（李　連姫）　…… 9
小学校学習指導要領に見られる学力観
（張　其煒）　…… 13
日本教員研修―教職員研修センターを中心に
（高　彦穎）　…… 17
野上弥生子研究―中国との関わりを中心に
（薛　白）　…… 21
韓日中複数形自称詞比較研究―私たち、우리、我们を中心に―
（黄　恵真）　…… 25
高分解能分光用外部共振器半導体レーザー光源の開発
（李　今朱）　…… 29
日本の小学校の美術の教科書研究
（洪　廷玟）　…… 33
日本のマスコミの中国報道―2013 年の読売新聞を例として―
（徐　瑶）　…… 37
梶井基次郎文学の諸相―「病気」「旅情」「闇」を中心に―
（蘇　芸）　…… 41
志賀直哉の作品における死生観―「城の崎にて」を中心に―
（陳　伊蘭）　…… 45
石川達三の〈戦前期〉・そのリアリズムの行方―『蒼氓』・『日陰の村』・『生きてゐる兵隊』を中心に―
（呉　恵升）　…… 49
安房直子のファンタジー物語の特質
（王　珂）　…… 53
小川未明の童話作品における「調和」意識を見る
（何　麗欽）　…… 57

留学生科目の概要・彙報　…… 61
留学生名簿　…… 62
写真集　…… 63
おわりに
（下田　誠）　…… 65

は　じ　め　に

東京学芸大学理事・副学長　長谷川　正

各国の教育界では、学問や社会の進歩や児童・生徒の多様化等に伴い、学校教育を時代に即したより良い新しい教育としていくための教育改革を進めています。このような教育改革を実現していくには，教員の役割が今まで以上に重要となります。教員には、教科に関する十分な専門的知識とともに、優れたカリキュラム・教材開発能力と新しい教育を遂行していくだけの教授法等を身に付けていることが要求されます。これからの教員を養成していく大学には，教員養成の質保証が求められています。この教員養成の質保証を目指して東アジアの教員養成系大学間で平成 21 年に東アジア教員養成国際コンソーシアムを構築し，体系的な研究組織を編成して国際共同研究を行い，毎年国際シンポジウムも開催しています。

本研修レポート集は，日本学生支援機構平成 25 年度留学生交流支援制度（短期受入れ）プログラムに採択された「東アジア教員養成国際コンソーシアム学生相互交流プログラム」に参加した中華人民共和国からの留学生 10 名と大韓民国からの留学生３名の研究成果をまとめたものです。この学生相互交流プログラムは，上記東アジア教員養成国際コンソーシアムを基盤としています。

留学生の研究は，日本の学習指導要領や教科書に基づく研究から専門分野の研究まで多岐に渡っています。学習指導要領や教科書に基づく研究は，自国の教育との比較ができますので，教育関係の職に就いた時，国際的視点を持って自国の教育を発展させていくのに役立つでしょう。また，特定のテーマについて専門的視点から深く研究すると，その教科についての専門的知識も深まります。この専門的知識を教育に還元すれば，新しい教材が開発できるでしょうし，児童・生徒のレベルに合わせて専門的知識に裏打ちされた分かりやすい授業を行うこともできるでしょう。

この学生相互交流プログラムは，参加した留学生達の教育に対する知見を広め，教育力を高めるのに役立ったと思います。留学生達は，日々の生活も通して国際的視点から日本を理解することもできたと思います。今後の活躍を期待しています。

最後に，このプログラムを支援・推進してくださった関係者の方々に感謝申し上げます。

東アジア的「学びの共同体」と「教学相長」

岩田康之（教員養成カリキュラム開発研究センター教授）

１．東アジア教員養成国際コンソーシアムの学生交流

東アジア教員養成国際コンソーシアム（日本・中国メインランド・韓国・台湾・香港の計 43 の、主に教育系大学による連合体）は 2009 年の結成以来、東アジア域内の教育系大学に学ぶ学生たちの交流に取り組んできている。これは同年 10 月に北京で開かれた日中韓サミットで当時の鳩山由紀夫首相（民主党）が提案した「キャンパス・アジア」（アジア域内の大学による質の高い学生交流の活性化）構想にもマッチしており、同コンソーシアムに参加する多くの教育系大学に共通する課題となっていた。今回来日した学生たちへの奨学金プログラム（JASSO・留学生交流支援制度〔短期派遣〕「東アジア教員養成国際コンソーシアム学生相互交流プログラム」）の申請―採択―交付といった一連の経緯も、こうした流れの中で生まれた。

高等教育のグローバル化は急速に進みつつあるものの、東アジアの教育系大学の間で学生交流を行うのは、実際にはそうたやすいものではない。私の見るところ、その理由は(1)伝統的な大学に比べ、後発の高等教育機関が多い教育系大学には、そもそも国際交流に関するノウハウの蓄積が乏しい、(2)教育系大学の重要なミッションである教員養成教育には多様な学問領域が混在しており、なおかつこれらの大学の相当部分は教員養成を直接の目的としない教育組織を持っている、(3)教育系大学に学ぶ学生の多くは「国内にあって安定した職」としての教職を志望しており、グローバル志向が比較的乏しい、(4)「東アジア」域内においては国際語としての英語の比重が低く、学生交流には言語の壁がある、などに求められる（このことは「２」に述べる学生の多様さにもつながっている）。

「東アジア」に焦点化させて教師と教育系大学のあり方を捉えてみることは、たとえば「西ヨーロッパ」（EU 域内とも相当に重なる）と対比の上でたいへん興味深い。端的に言えば「教師」という漢語（日本語では「キョウシ」、中国語では「jiao si≒ジャオスィ」、韓国語では「교사 gyo sa≒ギョサ」、と発音は微妙に異なる）で表される存在（東アジア的教師像）と、teacher というアルファベットで表される存在（西ヨーロッパ的教師像）とは、その含意が相当に異なる。英語の teacher が文字通り教授行為＝教えること（teach）を業務の中心とする職業人であるのに対し、漢語の「教師」は単に教えるというだけでなく、学ぶ者に対しての人格的なモデル（師）の意味を帯びている。このことは、西ヨーロッパに広く流布するキリスト教が全知全能の唯一の神を前提とするのに対し、東アジアに広く流布する儒教や仏教における知はそれを獲得することが「徳」であり、多くの知を積み上げた人が「先生」「老師」として尊崇されるという文化的な背景にも関わる。さらには、西ヨーロッパの高等教育機関が専門分化した学問それぞれの教育・研究を学部（faculty）・学

科（department）を基調とするのに対して、中国の「書院」を典型例とする東アジア的なそれは学問の研鑽と人格の陶冶を師弟がともに行っていく場であるという対照にもつながっている。

２.「学びの共同体」の魅力

2013 年 10 月に、中国メインランドと韓国の 6 つの大学から、この「東アジア教員養成国際コンソーシアム学生相互交流プログラム」の対象となった 13 名の学生が東京学芸大学にやってきた。この 13 名は巻末の表にもあるように、学年も、専攻も、まちまちである。この時既に日本の政界で民主党は下野しており、2012 年 12 月にカムバックした安倍晋三首相（自由民主党）が中国・韓国に対する強硬姿勢を打ち出す中での来日であった。

この 13 名は、先に挙げた(4)に関しては、東アジア域内の複数言語を自在に操るという点でいずれもユニークで、かつ今後に期待される人材であると言える。ちょうど EU が、域内複数言語を使える人材の育成に共同で取り組んでいる（そのための語学教師の交流をきっかけとして、教師のモビリティが活性化している側面もある）ように、本気で「東アジア共同体」を考えていこうとするならば東アジア域内の複数言語を操る人材の養成は必須である。また、上述のように英語の teacher とは異なる漢語の「教師」のありようを東アジアの枠組みで考えていこうとするときに、英語のみに頼ることの愚は明らかである。この点、「天命を知る」中国語晩学者で、習得の歩みの遅い私の目には、流暢な日本語で発表やディスカッションをこなす学生たちはたいへん好もしく映った。

13 名の学年や専攻がまちまちな理由は、先に挙げた(2)(3)に関わるものであろうと推測される。東アジア教員養成国際コンソーシアムに参加する各大学において、「日本に行って日本語の授業に参加する」ことを優先させて人選を行った結果として、このようになったのであろう。彼らを受け入れる東京学芸大学の体勢も、下田誠准教授（国際戦略推進本部・東アジア教員養成国際コンソーシアム事業実施部会長）を中心に整えられたが、こちらも最初から明確なプランやポリシーがあったわけではなかった（これは先に挙げた(1)に関わる）。とりあえず共通科目としての「東アジアの教育と文化」「東アジア教師論演習」（いずれも 2013 年度秋学期）、「東アジア教育演習」（2014 年度春学期）の三つを設定し、あとはそれぞれの専攻を勘案して指導教員をお願いした先生方の指導に委ねることとした。

この共通科目三つに「副担任」的に関わるなど、私はこの「13 名の中韓大学生＋東京学芸大学の先生方」という学びの共同体の相当部分にお付き合いしたが、まず学生たちの知的好奇心の強さ（知への貪欲さ）、そして互いに学び合う姿勢というのには感心した。そしてそれぞれ指導に当たった本学の先生方も、誠実かつ適切に彼らの問題関心を活かすような指導をしてくれたように思う。私自身は、日中比較教育に関心を持つ大学院生二人の指導を直接に引き受けたが、その他の学生たちがそれぞれのテーマについてそれぞれの指導教員のもとで研究を進める様子からも学ぶことは多かった。惜しむらくは、この「学びの

共同体」と本学の日本人学生たちとの接点がもっと多かったなら、本学学生のグローバル志向を育む上でよい影響があったように思う。

３.「教学相長」ということ

「東アジアの教育と文化」の授業で、私は『日中教育学対話Ⅰ』（山﨑髙哉・労凱声編、春秋社・2008 年）に収めた拙稿「近代日本の教師像と教員養成改革」（第 11 章）をテキストとして用いた。この本は、表題の示すとおり日中の教育学者が教育学研究の主要なテーマに関してそれぞれ一人ずつ「対話」を行うという形式で編まれており、教師教育をめぐっての第六の「対話」（第 11・12 章）の私の相手は顧明遠（北京師範大学教授・中国教育学会会長）氏による「師範教育の伝統と変遷」であった。拙稿では、先に挙げたような「東アジア的教師像」と「西ヨーロッパ的教師像」の対比や、その養成機関のありようなどを主に日本の状況に即して（「対話」の相手方である中国の事情にも目配りをしつつ）、近代以降の歴史的・文化的背景から近年の教育改革論まで巨視的に捉える試みをしたのだが、それをテキストにして中国・韓国の教育系大学にレクチャーをする際に、私は改めて日本に「師範大学」がないことの意味を再確認させられたのである。詳しくは別の論考（「教員養成改革の日本的構造―「開放制」原則下の質的向上策を考える―」日本教育学会『教育学研究』第 80 巻第 4 号、2013 年 12 月）に譲るが、日本の近代初期における大学の整備は「書院」モデルではなくヨーロッパに範を採ったがために、東アジア的教師の養成として「師範教育」と相容れなかったのである。そのことを目の前にいる中韓の大学生にどう説得的に語るか、を考える中で私は「教学相長」ということを痛感した。

「教学相長」という言葉は、『礼記』學記にあり、その含意は教えることと学ぶことの相乗効果（教えることで、改めて学ぶことの意義がわかる）にある。私がこの言葉に触れたのは、首都師範大学の王長純氏の著した『教師発展学校研究』（2009 年・北京師範大学出版社）によってである。王長純氏は、アメリカの職能開発学校（professional development school ＝ PDS）の発想を中国流に翻案した「教師発展学校」（teacher development school ＝ TDS）の提唱者として有名である。2011 年の 3 月、奇しくも東日本大震災の起きる前の週に私はこの「教師発展学校」の取り組みを行っている河南師範大学附属中学（河南省新郷市）を彼の案内で見学させてもらう機会を得たのだが、そこで彼が強調していたのは、アメリカの PDS では教師の職業的力量（professionalism）の向上に焦点が置かれるのだが、中国では単に専門的な力量を向上させるだけでなくて教師その人自身が成長することが大切なのだ、それこそが「教学相長」なのだ、ということであった。教える側も、学ぶ側も、ともに成長する。私もこの東アジア教員養成国際コンソーシアム学生相互交流プログラムの「学びの共同体」を通じて少しは成長したように思う。

ともあれ、教える側にとって最もうれしいことは、学ぶ側がこの後もいきいきと学び続け、成長していってくれることである。13 名の今後に期待したいと思う。

研修
レポート編

遊びに関する日本幼稚園の教師と保護者の認識比較研究

李　連姫

１．　はじめに

1）研究背景と研究目的

遊びは幼児が世界を理解し、自分の世界を新しく創造していくことに必要な活動である。遊びを通して幼児は新しいものを認識し、刺激に反応し、自分の経験を検証する。遊びを通して幼児は運動感覚能力を形成していき、遊びの規則を理解し、スキルを高め、社会性を発達させる。このように幼児は遊びを通して身体的、知的、情緒的、社会的な発達を形成し、全面的に成長する。

それゆえ、大人が幼児の遊びに関してどのような認識を持っているのかは幼児の発達と重要な関係がある。

日本の幼稚園教育指導要領解説（２００８）には「幼児期の生活のほとんどは遊びによって占められている。……自発的な活動としての遊びにおいて、幼児は心身全体を動かせ、様々な体験を通して心身の調和のとれた全体的な発達の基礎を築いていくのである。その意味で、自発的活動としての遊びは、幼児期特有の学習なのである。」と述べられている。日本では教育政策として幼児の遊びの重要性を強調している。日本の幼稚園では自由遊びと一斉保育をする幼稚園がある。教師と保護者が遊びに関してどのような認識を持っているかは、遊び中心の教育理念を教育現場において実現できるかと重要な関係があり、幼児の発達とも重要な関係がある。

そこで本研究では遊びに関する幼稚園の教師と保護者の認識を調査、比較して具体的な考えとその考えの形成原因をとらえて幼児の遊びに関する教師と保護者の理解を促進するのを目的とする。

2）研究問題

本研究は日本の教師と保護者が遊びに関する認識の相違点を調査、分析する。また遊びの役割、特徴、幼児の好きな遊び活動、遊び時間、遊びの指導、遊びの妨害要因、遊びと教育現象、論争があるおもちゃなどについての認識を変数（教師・保護者の学歴、教師の資格、幼児の性別など）によっての差があるか分析する。また教師と保護者のインタビューを通して認識の形成原因をとらえる。

２．　理論背景

１．遊びの概念と特徴

遊びの概念と特性について１８，１９世紀から今まで多くの心理学者、教育者たちが多様な立場で遊びの概念について論述しているが、遊びに関する理論的な見解は一致しない。それは遊びが多種多様で、複雑な性質を含んでいるからだ。山田　敏は遊びとは何なのか、という素朴な問いに十分答えきるものにはなっていないと述べている。

シラーの余剰エネルギー説は功利目的がなくて自由な活動つまり審美的な自由活動を「遊び」だとする。グロスの生活準備説は、人間はきわめて不完全な形で生まれてから成長期が長く、その間将来に生活に必要なことを遊びの中で練習し、将来の実際生活のために準備がなされているという。つまり遊びは学習あるいは練習で、将来生活に対す

る準備であるということだ。この理論は目的論で、遊びは価値がないという伝統観念にとって積極的な意義があるが、大人になった時の遊びは説明できない。遊びの余剰エネルギー説と違って、遊びの休養説は遊びはエネルギーの余剰ではなく不足だと主張する。Moritz Lazarus（ドイツ哲学者)は、遊びはエネルギーを回復する役割を有する活動であると言う。Patrick（哲学者）は遊びは幼児自然的、積極的な生活だと主張する。しかし仮に遊びの基本機能はひとに仕事のストレスから解脱してエネルギーを回復させることとすると、“仕事”をしない幼児はどうして遊ぶのかを説明できない。このように早期の遊び理論は主に“仕事”を遊びの反対面としてその原因を説明する。Sigmund Freud 遊びは幼児の人格の発展に重要な役割があると主張する。彼は遊びの反対面は“仕事”ではなく、“現実生活”であり、遊びは幼児が現実で満足できない望みを満足させるものだと主張する。Eriksen は遊びは焦燥を解消し、幼児の望みを満足させ、幼児の人格発展に積極的な役割があると主張する。ピアジェは遊びは思考の発達階段と平行して認知発達の過程によって引き起こされると主張する。

遊びの特徴に関する研究は多い。Neumann は控除（control)、真実性(reality)、動機(motivation)で活動が遊びか遊びでないかを確定する。つまり遊びの特徴は内部控除、内部真実、内部動機である。Krasnor と Pepler は遊びは四つの特徴があるという。それは融通性（flexibility)、積極的な感情(positive affect)、虚構性(nonliterality)、内部動機(intrinsic motivation)である。活動が上記の四つの特徴を有していたら遊びだという。Catherine Garvey は遊び活動には五つの特徴があるという。それは遊びは楽しい活動、遊びは外部の目標がない、遊びは自発の活動、遊びには遊ぶ者に対して積極的な取り締まりがあり、遊びと非遊びとは体系的なつながりがあるということだ。Roger Caillois は遊びは自由、変化、非生産性、規則の支配、虚構性などの特徴があると主張する。

２．遊びの種類

遊びの種類に関する研究は研究者の標準によって分類が違う。ピアジェは認知発達に基づいて遊びを練習性遊び、象徴あそび、構成遊び、規則遊びに分けた。Parten は幼児の参与程度によってなにもしていない、一人遊び、傍観的行動、平行遊び、連合遊び、協同遊びと分けた。Brian Sutton-smith は遊びの経験によって模倣遊び、探求遊び、点検遊び、造形遊びに分けた。Garvey は遊びの対象によって身体を材料にした遊び、物を材料にした遊び、言葉を材料にした遊び、社会生活を材料にした遊び、規則を材料にした遊びに分けた。柿沼 儀子と茅野　記子の研究では遊びの種類を運動、自然、収集、創作、ゲーム、ごっこ遊び、受容、玩具、その他に分けた。

３．遊びの重要性と役割

１８，１９世紀から学者たちは遊びに関する研究を行ってきた。遊びの理論解釈について一致した考えはないが、遊びの価値についてはいろいろな研究を通して遊びが幼児の運動能力の発展、概念の発展、問題の解決及び社会性の発展と感情の発展、個性の発展についての重要な役割はしだいに人々に認められてきている。

Hurlock は遊びが幼児の発達においての役割を以下のように整理した。

① 身体発達：遊びは幼児が身体のすべての部分を動かせ、筋肉の発達に必要なものだ。また幼児のストレスをとる手段である。

② コミュニケーションの促進：他の幼児とよく遊べるためには幼児は遊びと通して友達が理解できる言葉でコミュニケーションの方法を学ぶ。
③ 抑制された情緒エネルギーの発散：遊びは幼児が環境から行動を制限されたために生じるストレスを解消させる。
④ 欲求の発散：他の方法で解決できない欲求は遊びを通して解決できる。
⑤ 学習の根源：遊びは幼児が家庭と学校で学べないものを本、TV、環境を通して学べる機会を与える。
⑥ 想像力：遊びの経験を通して、幼児は新しいものを想像する満足感を味わう。
⑦ 自己認識の発達：遊びの中で幼児は自分の能力は何か、友達の能力と比較して自分に関する明確な概念を発達させる。
⑧ 社会性の学習：遊びを通して幼児は社会関係がどう形成するか、社会関係の問題にぶつかり、解決する方法を学ぶ。
⑨ 道徳基準：幼児は家庭と学校で正否を学ぶが、道徳の基準の強化は遊び集団の中で最も多く学べる。
⑩ 適切な性役割の学習：幼児は家庭と学校で性役割を学ぶが、遊び集団の構成要因になった時、性役割を受け入れることがわかる。

日本の研究者の論文でも遊びの役割に関する論述を見られる。武石宣子は幼児期では遊びの行動が学習であり、そこから分化していく過程において遊びを育てることは、人間としての成長過程上で大切なことだと述べた。遊びが知的の発達においての役割は主に想像遊びの重要性が強調されている。松田己統美は想像力の発達過程において、遊びのもつ意義は大きいと述べた。子どもが体験を通して遊ぶ場面で、より問題解決能力を発揮できることを示した研究は上野の保存実験場面研究がある。この研究では子どもの考える世界の豊かさを引き出すには、日常的で、具体的な体験の場を離れては十分に力を発揮することが難しいと述べた。渡邊広人は調査法を通して遊び能力、向社会的行動能力、社会的スキルのそれぞれの間に、かなりの相関があることが分かるようになったと述べた。三宅康将と伊藤良子は発達障がい幼児に対し、情動的交流遊びを中心とした指導を実施し、コミュニケーションの発達に効果があるかないかを検討した研究論文で情動的交流遊びを通して子どもに快的情動が生じ、指導者との情動の共有も成立していく課程の中で、社会的相互作用が質的に発展していき、子どももコミュニケーション行動の発達が認められたととらえられたと述べた。このように遊びは幼児の知的、社会性、問題解決などの発達に重要な役割がある。

３．　方法及び工具

⑴ 研究対象：幼児教育機関の教師と保護者各 150 人。幼児教育機関は幼稚園、保育所、子供認定園を含め、私立と公立を含める。教師は学歴、教師資格などの基本背景を記録する。保護者は学歴、子供の性別などの基本背景を記録する。
⑵ 研究工具：調査工具は韓国の金喜貞が作った調査アンケートに基ついて修正して使う。
⑶ 研究手順：
　(ア)アンケートを少ない対象に測量し、アンケートの適切性、問題性について要素分析してアンケートを修正する。

(イ)修正したアンケートで教師と保護者に再びアンケートしてデータをもらう。
(ウ)一部分の教師と保護者にインタビューをする。
(エ)SPSS でアンケートデータを分析し、教師と保護者の認識について比較する。インタビューの内容を分析してその認識の形成原因と背景を分析する。

研究対象―教師　　研究対象―保護者

変数	区別		変数	区別
勤務機関	私立・公立		幼児の性別	男・女
	幼稚園・保育所・認定子供園		幼児の年齢	３・４・５
学歴	高校卒・短期大学卒・大学卒・大学院卒		学歴	高校卒・短期大学卒・大学卒・大学院卒
資格	幼稚園教師・保育士			

（指導教員：伊藤良子教授）

参考論文

① 山田敏「『遊び』の概念について」日本教育社会学会大会発表要旨集録（29），5，1977-09-30

② 刘焱「幼児遊び通論」北京師範大学出版社（２００４年）　P85-129

③ 武政辰野「発達心理学概説」金子書房、１９７０

④ 柿沼儀子、芳野紀子「乳幼児の遊びの発達に関する調査研究―遊びの種類について」，日本保育学会大会研究論文集（39），166-167，1986-05-10

⑤ 呉今子「幼児遊びに関する保護者の認識及び役割に関する研究」１９８２年Ｐ１０

⑥ 武石宣子「幼児期の身体表現を伴う創造的遊びに見る教育的効果」

⑦ 松田己統美「幼児教育における知的能力の発達と遊びの役割」日本教育方法学会紀要「教育方法学研究」第１８巻　１９９２年　P133-141

⑧ 河邊貴子「今日から明日へつながる保育」萌文書林　Ｐ１６５

⑨ 渡邊広人「児童の仲間集団形成に及ぼす遊びの役割」愛媛大学教育学紀要教育科学第５０巻７３－８１　２００４年

⑩ 三宅康将、伊藤良子「発達障がい児のコミュニケーション指導における情動的交流遊びの役割」特殊教育学研究、３９（５）１－８，２００２

小学校学習指導要領に見られる学力観

張　其煒

1、問題意識

学習指導要領は、文部科学省が定める各学校での教育課程（カリキュラム）を編成する際の基準である。その中では、各学校がそれぞれの教科などの目標や大まかな教育内容を定めている。学校教育を実施するための基準である以上、国の学校教育に対する考え方が十分反映されていると思われる。特に、児童生徒にどのような知識や技能を身につけさせるかという学力についての考え方（学力観）が凝縮されていると考えられる。学習指導要領を分析・解釈することによって、学力観を明らかにすることができると思う。

2、研究目的

4 つの小学校学習指導要領の改訂基本方針を中心に、それぞれの特徴や互いに相違するところを比較しながら、学力観という軸でどのような考え方が含まれているかを明らかにすることである。

3、研究方法

テキスト分析法、比較法による。

4、分析資料

1977 年、1989 年、1998 年、2008 年に告示した 4 つの『小学校学習指導要領』、『小学校学習指導要領解説　総則編』

5、1977 年、1989 年、1998 年及び 2008 年改訂の小学校学習指導要領の比較を通して

5.1　概念解釈

➢　学習指導要領とは何か

『全国のどの地域で教育を受けても、一定の水準の教育を受けられるようにするため、文部科学省では、学校教育法等に基づき、各学校で教育課程（カリキュラム）を編成する際の基準を定めています。これを「学習指導要領」といいます。

「学習指導要領」では、小学校、中学校、高等学校等ごとに、それぞれの教科等の目標や大まかな教育内容を定めています。また、これとは別に、学校教育法施行規則で、例えば小・中学校の教科等の年間の標準授業時数等が定められています。各学校では、この「学習指導要領」や年間の標準授業時数等を踏まえ、地域や学校の実態に応じて、教育課程（カリキュラム）を編成しています。』（文部科学省 HP より）

➢　新しい学力観とは何か

「新しい学力観とは、知識・意欲・態度を重視し、思考力・判断力・表現力に裏付けられた自己教育力を獲得する学力観を理念型としている。」（『新しい時代の教育課程』より）

➢　「生きる力」とは何か

文部科学省 HP の内容を要約すると、「生きる力」とは、知・徳・体のバランスのとれた力である。知とは確かな学力のことである。具体的には基礎的な知識・技能を習得し、そ

れらを活用して、自ら考え、判断し、表現することにより、様々な問題に積極的に対応し、解決する力のことを指す。徳とは豊かな人間性のことである。具体的には自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性のことを指す。体とは健康・体力のことである。具体的にはたくましく生きるための健康や体力のことを指す。

5.2　基本方針の比較と分析

5.2.1　基本方針の比較

1977年、1989年、1998年及び2008年の学習指導要領改訂の基本方針			
1977年	1989年	1998年	2008年
１．道徳教育や体育を一層重視し、知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな児童生徒の育成を図る。 ２．各教科の基礎的・基本的事項を身につけられるように教育内容を精選し、創造的な能力の育成を図る。 ３．ゆとりのある充実した学校生活を実現するため、各教科の標準授業時数を削減し、地域や学校の実態に即して授業時数の運用に創意工夫を加えることができる。 ４．学習指導要領に定める各教科等の目標、内容を中核的な事項にとどめ、教師の自発的な創意工夫を加えた学習指導要領が十分展開できるようにする。	１．教育活動全体を通じて、児童の発達の段階や各教科などの特性に応じ、豊かな心をもち、たくましく生きる人間の育成を図ること。 ２．国民として必要とされる基礎的・基本的な内容を重視し、個性を生かす教育を充実するとともに、幼稚園教育や中学校教育との関連を緊密にして各教科などの内容の一貫性を図ること。 ３．社会の変化に主体的に対応できる能力の育成や創造性の基礎を培うことを重視するとともに、自ら学ぶ意欲を高めるようにすること。 ４．我が国の文化と伝統を尊重する態度の育成を重視するとともに、世界の文化や歴史についての理解を深め、国際社会に生きる人間としての資質を養うこと。	１．豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること。 ２．自ら学び、自ら考える力を育成すること。 ３．ゆとりのある教育活動を展開する中で、基礎・基本の確実な定着をはかり、個性を活かす教育を充実すること。 ４．各学校が創意工夫を活かし特色ある教育、特色ある学校づくりを進めること。	１．教育基本法改正等で明確となった教育の理念を踏まえ「生きる力」を育成すること。 ２．知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視すること。 ３．道徳教育や体育などの充実により、豊かな心や健やかな体を育成すること。

5.2.2　基本方針の分析

5.2.1の表が示しているように、4回にわたって改訂された学習指導要領の基本方針にはそれぞれの特徴が見えてくる。1977年の基本方針の特徴として一つは、「道徳教育や体育を一層重視し、知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな児童生徒の育成を図る。」とあるが、その背景には教育の現代化がもたらした「知識偏重」が問題となっている。知識の詰め込みが行き過ぎていたため、道徳教育や体育を重視することで知・徳・体のバランスをとるようにするのが狙いであった。具体的には、国語、算数、社会科、理科の時間が削減され、

特別活動、道徳、体育等の時間の割合が増えている。また、教育内容の精選によって算数等での難しい教育内容が削減された。基本方針に示したように、知としての部分に基礎的・基本的な内容が残っている。特徴としてもう一つはゆとりを打ち出したことである。その具体的には標準授業時数が削減され、学校の自由裁量が求められる。たとえば、学校では合計時間数を減らさないで、「ゆとりの時間」を設けて体力増進活動、自然・文化の体験活動等を行う。学校での教科書的な知識の削減で子供の体験活動を増やすことで、子供がゆとりのある学校生活を送れるように工夫している。

1989 年の学習指導要領の改訂となると、3 つの特徴が見られる。1 つ目は個性を生かす教育が重視される。指導方法として個に応じた指導などが求めれる。また、個性と連関して子ども一人一人の見方や考え方も大切にされ、自ら学ぶ意欲や主体的な学習の仕方も重要視されている。2 つ目は「新しい学力観」の特徴として知識・理解・技能の上に、関心・意欲・態度が付け加えられた。旧来の知識・技能を重視する学力観とは違って、感情的な要素も学力要素として捉えられ、「新しい学力観」と呼ばれた。3 つ目は 1977 年には見られない日本人と国際人としての資質が求められる。この特徴の当時の日本をめぐる情報化、国際化、価値観多様化等の環境によるものだと思われる。

1998 年の学習指導要領の改訂がゆとりの路線の続きに走り、「ゆとり」の中の「生きる力」を育むことが大きな特徴としている。その具現化したものは「総合的な学習の時間」の新設である。小学校学習指導要領の総則には一つの大きな項目として取り上げられている。そのねらいについては「(1) 自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、より良く問題を解決する資質や能力を育てること。(2) 学び方やものの考え方を身につけ、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること。(3) 各教科、道徳及び特別活動で身につけた知識や技能等を総合に関連付け、学習や生活において生かし、それらが総合的に働くようにすること。」(『小学校学習指導要領』(1998)) 1989 年の「新しい学力観」と比べると、自ら学び、考えることは一つの目標に帰着している。それは、問題解決力である。主体的な関心・意欲・態度からはじめて主体的な考えが具体的な応用に繋がってくるようになった。しかも、総合的な学習の時間として系統的な一つの科目として成立したのである。

2008 年の学習指導要領の改訂は「生きる力」を特徴としてとらえている。「生きる力」が知・徳・体という 3 つの調和のとれた要素によって構成される。特に、知を確かな学力として明確にした。確かな学力は従来の基礎・基本をふまえ、思考力・判断力・表現力、課題発見力・問題解決能力等を含めた総合的な学力観である。2008 年の学習指導要領には新たな内容が付け加えられた。2006 年の教育基本法の改正によって新たな教育の目標として現れる公共の精神や郷土愛、国際の平和に寄与すること等も「生きる力」を育むための重要な教育内容だとされている。

5.3 まとめ

4 回の学習指導要領の改訂を学力観という軸におくと、次のようになる。1977 年の学習指導要領改訂が高度化した現代教育（知識偏重の教育）から知識の精選化などによってすこしでもゆとりのある教育へと変換する。このような変換が知・徳・体のバランスを図ろうとしている。そこにある学力観は基礎基本を重視するとともに、人間性も見逃さないことである。しかし、1989 年の改訂では、「新しい学力観」を打ち出して、知・徳・体という

3 つの要素の中で「知」に重点を置く。知識・理解・技能の上に関心・意欲・態度を付け加えて、ゆとりのさらなる一歩を歩みだした。1998 年の改訂となると、「新しい学力観」を踏まえて、学力に新たな要素が入った。「ゆとり」の中で「生きる力」を育むために「思考力・判断力・表現力」、「課題発見力・問題解決能力」等が重要視され、実践された。2008 年には 1998 年の路線に沿って「新しい学力観」以来の学力諸要素を総合的に統合し、知・徳・体のバランスを調整して、「確かな学力」と名づけた。

1977 年以来の学習指導要領改訂が今の「確かな学力観」を形成するための試行錯誤と蓄積だと考えている。

6、今後の展開

４つの学習指導要領に見られる学力観は知・徳・体のバランスを調整する上で、知としての学力の部分をだんだん変化させている。つまり、学力の構成要素が基本的な知識・技能をベースに関心・意欲・態度、思考力・判断力・表現力、課題発見力・問題解決力等付け加えられて重要視されるようになった。傾向としては、知識・技能という静的な内容を応用という動的な応用力、創造力へと発展している。今後の展開として国際化や現代科学技術の影響で、人的なつながりやチームワーク等リーダーシップ的な社会牽引力や創造力が一層大切にされるだろうと思う。

（指導教員：岸学教授）

参考文献

文部科学省（2008）『小学校学習指導要領』東洋館出版社
文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説　総則編』東洋館出版社
田中耕治・水原克敏・三石初雄・西岡加名恵（2011）『新しい時代の教育課程』有斐閣　70～77pp.

日本教員研修―教職員研修センターを中心に

高　彦穎

１.問題意識

近年、中国学校現場で学生の学力が下がって、教員資質と能力の不足また暴力事件など様々な教育問題が生じた。「学校教育」および「教員資質と能力の向上」という課題が教育改革の焦点になった。『基礎教育改革と発展について国務院の決定』(《国务院关于基础教育改革与发展的决定》) と『国家中長期教育改革と発展計画』(国家中长期教育改革和发展规划纲要 2010-2020 年) 等の政府書類に基づいて、中国における教師教育また教師の現職研修が重視されるようになった。一方、師範学校の合併、教師養成の開放制を通じて、今の中国で就職する前の教師養成は大きな発展を達した。他方、教師現職研修システムの不完備、研修機会の不平等などの問題点がある。教師の現職研修機関及び政府と高等教育機関の連携に対して、様々な問題点も議論される。

日本における教員研修制度・教職員研修センターは中国と比較して、より良いシステムが形成される。日本教員研修―教職員研修センターを中心に研究して、中国の現状と比べて、中国の教師教育・教員現職研修に学ぶ経験をまとめたいのである。

２.先行研究

日本では教員研修についての研究は主に研修政策の制定過程と特徴をめぐって、政策の解説に注目する。例として、現職研修の実施と教職員研修センターについての紹介は永岡順・奥田真丈『教職員の研修』、牧昌見『教員研修の総合的研究』、海後宗臣『戦後日本教員研修制度成立過程の研究』などの著作に短い章節に提出される。中国では、中国における教員研修の紹介は少なくて、多くのは教員進修学校に就職する先生の方々が書いた教員研修実施中の問題点である。日本教員研修と教職員研修センターの総合的研究も足りないのである。

３.研究内容

日本教員研修の歴史と発展、研修体系を紹介する上に、教職員研修センターに注目して、研修目標と研修理念・研修システム・研修方法・研修内容および研修の資質保障などの内容を説明する。そして、研修を受ける先生の方々に意識調査の協力をお願いして、アンケートによって、日本教員研修・教職員研修センターの特徴と不足を分析する。中国の教員研修現状と比べて、研究論文を完成する。

４．目次

第１章　　概要
１．１　　問題意識　１．２　　先行研修と概念説明　１．３　　研究方法と研究意義
第２章　　日本教員研修の沿革
２．１　　戦前日本教員研修　２．２　　戦後日本教員研修制度の確立
２．３　　研修体系と発展
第３章　　独立行政法人教員研修センター

３．１　沿革　３．２　研修方法と内容(研修を行う、委託研修、研修教材の編纂)
３．３　資質保障
第４章　地方教員研修センター・東京教職員研修センターを中心に
４．１　東京教職員研修センター沿革　４．２　目標と理念
４．３　研修体系と内容
４．３．１　公立学校教職員研修
４．３．２　行政教員研修
４．３．３　東京教師養成塾
４．４　資質保障
第５章　日本教員研修・教職員研修センター特徴と不足
５．１　意識調査　５．２　特徴と不足についての分析
第６章　中国教員研修現状と日本の比較
６．１　中国教員研修現状と問題点　６．２　日本から学ぶ経験の説明

５.研究概述

研修主体から分類すると、日本教員研修はおもに自主研修と共同研修に分ける。共同研修は校内研修と校外研修の二種類がある。研修の行う機関によって、校外研修は独立行政法人研修センター・都道府県市町村教育委員会が行う研修と民間研究団体が行う研修に分ける。義務との関係によって、研修は職務研修、勤務期間職務義務免除研修また勤務時間以外の自主研修の三種類を含める。各教職員研修センターは教育委員会の指導によって、実情に応じる研修を制定して研修を実施する。まとめると、日本教員研修と教職員研修センターが行う研修は以下の特徴を持つ。

① 完備な法律保障：『教育公務員特例法』『独立行政法人教員研修センター法』
２００９年『教職員許可法』更新など
② 多様な研修内容と方法：授業をやる教員だけではなく、行政教職員の研修もある。
職層・職務に応じて研修を行う、校内研修・校外研修・美術館など見学研修もある
③ 教育連携：　中央研修から地方研修までの連携、地域教育資源を利用する
④ 資質保障：　独立法人行政教員研究センターの評価は文部科学省設置する独立行政法人委員会初等中等教育分科会教員研修センター部が行う。
五年中間報告と計画の報告と自己評価の形式がある。
東京都教職員研修センター研修研究委員会・運営協議会

特徴を総括する上で、意識調査の分析によって、研修実施する過程に問題点を論述する。

６．意識調査のアンケート

教員研修に関する意識調査

＜調査のお願い＞

謹啓

私は東京学芸大学交換留学生の高彦穎と申します。専攻は日中比較教育で、日本と中国における教員研修の比較研究について修士論文を準備しております。東京学芸大学大学院

教育学研究科に留学している間に、日本の教員研修の状況についての資料収集を行いたいと考えております。

つきましては、この研究の一環として、日本で教員研修を受けている教師の方々に、研修に対するお考えをお聞かせいただきたく、ご協力をお願いいたします。お忙しいところ、ご協力していただき誠にありがとうございます。

なお、この意識調査でお答えいただいた内容は、研究以外の目的には使わず、資料としてのみ使用することをお約束いたします。ご不明な点がありましたら、下記宛てにご遠慮なくお問い合わせください。

敬具

高彦穎（コウ　ゲンエイ・上海師範大学大学院生）
＜gaoyanying1990@126.com＞
（指導教員：岩田康之・東京学芸大学教授）

Ⅰ．ご自身のことについておうかがいします。

①．性別：　男　　女

②．年齢：　（　　）歳

③．お持ちの教員免許状

学校種　（　　）

教　科　（　　）

④．現在の担当学年と教科

（　　）年生　　科目（　　）

⑤．校務分掌（　　）

⑥．そのほか（　　）

Ⅱ．採用と最初の職務について、おうかがいします。

①．採用試験を受けて教師になった理由をお聞かせくだい。

---

②．教師塾（大学生を対象としたもの）あるいは採用前研修に参加したことがありますか。参加した（参加しなかった）理由と合わせてお聞かせください。

---

③．（②に参加したことがある方におたずねします）研修の内容および方法についてご意見をお聞かせください。とくに役に立ったことがあったらお聞かせください。

---

④．現在、教師として、困難を抱えていること、悩んでいることはありますか。教職にうまく適応するため、研修に必要な支援は何だと思いますか。

Ⅲ．お受けになっている研修について、おうかがいします。

①．現在お受けになっている研修について、その方式（日程、運営）と内容についてお知

らせください。

---

②. ①でお答えになった研修についてどう思いますか。お考えをお聞かせください。

---

③. 研修をお受けになる際に、どんな内容に期待していますか。（当たる内容にすべて〇をおつけください。）

a.　分かりやすく授業をうまく進めること
b.　児童生徒の人間関係について適切なアドバイスを行うこと
c.　学級担任として学級をうまくまとめること
d.　校内の会議を円滑に進行させること
e.　学校行事を活性化させること
f.　その他

---

④. 勤務校で実施している校内研修の方法と内容を簡単にお聞かせください。

---

⑤. あなたは一週間に平均して何時間の授業をお持ちですか。研修を受けるためにその軽減などの支援がありますか。またどのような支援が望ましいと思いますか。お考えをお聞かせくさい。

---

⑥. 校外で行われている研修に参加したことがありますか。ありましたら、研修の内容や実施主体などを簡単にお聞かせくさい。

---

⑦. 現在お受けになっている研修（校内、校外）に特に役に立ったところ、印象深いところがありますか。お聞かせくさい。

---

⑧. 今までお受けになった研修に対するご意見や、今後への希望などをお聞かせくさい。

お忙しいところ、貴重な時間を割いていただきありがとうございます。

（指導教員：岩田康之教授）

注：

[1]永岡順、奥田真丈.教職員の研修[M].ぎょうせい.１９７９．８
[2]牧昌見.教員研修の総合的研究[M].ぎょうせい.1982
[3]海後宗臣.教員養成と戦後日本の教育改革[M].東京大學.1978
[4]文部科学省ホームページ　http://www.mext.go.jp/ [EB/OL]

野上弥生子研究 ―中国との関わりを中心に

薛　白

野上弥生子（1885 年 5 月 6 日 － 1985 年 3 月 30 日） は、日本の小説家、大分県臼杵市生まれ。14 歳の時に上京し、明治女学校に入学。夏目漱石門下の野上豊一郎と結婚する。『ホトトギス』に『縁』を掲載して作家デビュー。以来、死去するまで現役の作家として活躍する。昭和初年のプロレタリア文学が流行した時代には、社会進歩のための活動の中にあった非人間的な行動を追及した『真知子』を発表する一方で、思想と行動について悩む青年に焦点をあてた『若い息子』『哀しき少年』などを書き、また日本が戦争へ傾斜していく時期には、時流を批判した『黒い行列』（戦後、大幅に加筆して長編『迷路』に発展させる）と、良識ある知識階級の立場からの批判的リアリズムの文学を多く生み出した。

第二次世界大戦と戦後とも知識人の生き方を問う作品は多く、戦時下には書けなかった『黒い行列』の続編『迷路』で、敗戦までの日本の知識層のさまざまな生き方を重層的に描いた、『迷路』が完結した後に舞台となった中国を訪問し、延安まで足を伸ばすなど、行動力も旺盛であった。1985 年 3 月 30 日、老衰のため死去。99 歳没。

先行研究

野上弥生子研究について、女性文学者研究分野の専門家である渡辺澄子氏による以下のようなまとめがある。

明治・大正・昭和の三代を活動期とする、ほとんど百歳の長寿の、その死の際まで現役作家であり続けた、ほかに類例を見ぬ稀なる作家と高く称揚されながら、野上の資質及び活動形態によってか敬遠されがちで、本格的に取り組んだ論は意外に少なく、ほかの近代作家に比べて研究は遅れている。(野上弥生子のリアリズム――『森』を中心に　伊藤發子)

渡辺氏の以上のような観点からすでに何十年経った。現在の野上弥生子及び野上作品についての著作と論文を読むと、近年以来、野上研究はますます盛んになったのは確かなことが分かった。しかし、研究者たちは主に各作品における人物像、作品の構成論、及び一連の作品を対比しながら野上文学におけるリアリズムを探求することなどに視点が置かれることに容易に気付くだろう。昭和十一年一月に発表された第一部から、三十一年十月に書き上げられた第 6 部までの約 20 年の歳月をかけた大作『迷路』においても、戦後作者自身の反戦の態度を表わす作品である『狐』においても、及び一連の随筆と中国への旅行の直後に書かれた『私の中国旅行』においても、中国人に親しい感情を抱くことが読み取れた。しかしながら、野上弥生子の中国との関わりについての研究はほとんどないのは残念なことである。本論は野上作品において、「中国」という国は作品の中でどんな様態で現れるのか、戦後、中国作家協会の招きで、中国に行った時、目の前の中国と中国人に対して、彼女はどんな感情を抱いたのか、などの問題を分析しながら、野上弥生子の中国との関わりを明らかにすることが目的である。

野上弥生子作品における中国像

野上弥生子が作家になるまでの年譜を調べ、中国文化と関わる部分は管見の限り、以下

のような記述しかない。

明治二十八年（一八九五）、当時十歳の弥生子は臼杵尋常高等小学校入学。このころから小中村清矩中の国学者久保会蔵について『古今和歌集』、『万葉集』、『源氏物語』、『枕草子』及び『四書』の講読を受けた。

（『野上弥生子研究』　渡辺澄子著　八木書店　昭和44年12月10日　第一刷発行）

実際、野上の学生時代には中国文化にあまり触れなかったことが予想できる。小学校入学の時（当時 10 歳）、『四書』をすこし勉強して、四年後小学校卒業した。その四年間で勉強した漢文化の一つである『四書』は多かれ少なかれ野上にいい影響を与えたかもしれないが、当時の野上はまだ小学生なので、その影響は多くは言えなかろう。そのあと、野上弥生子は上京して、それからの精神形成上に重要な役割を果たした明治女学校に入学した。明治女学校はキリスト教の信仰をもととして、英語英文学教育を重視する学校として有名である。野上弥生子は、女学校で漢文化面の知識は教えられなかったが、国際的な雰囲気のおかげで、国際的な視野を持っている女性になった。野上豊一郎と結婚した後も、妻と母として家族の面倒を見るとともに、新聞記事を通して世界の出来事について深い関心を持っている。しかし、三人の子供の母として、海外旅行はそんなに容易なことではないといえるだろう。年齢を重ねれば重ねるほど、経験も深まるようになったし、考え方も成熟するようになった。作品もだんだん写生文からリアリズムの文学に変わっていった。子どもたちも次々大学に入った。野上弥生子はようやく昭和 10 年（一九三五年）五十歳の時、長男素一（当時 25 歳）とともに台湾に旅行した。翌年の四月に、紀行文『台湾遊記』を「改造」に発表した。その時の見聞について、22 年後に発表された『私の中国旅行』という作品の中で、野上は以下のように述べた、

台湾の旅において逢ったいわゆる本島人の人々が、私の家は広東であるの、また福建であるのと語る調子に、ちょうど私たちが生まれ故郷を青森県であるの、長野県であるのというのにそっくりなのに、複雑な感銘を受けたのもいまだに忘れえない。日本の、むしろ一般の植民地政策なるものに対して、私なりの素朴な感情を持ち始めたのは、この旅行が与えた一つの実感だといってよい。同時に私は朝鮮、満州をぜひ見なければならないと考えた。（『私の中国旅行』　野上弥生子　岩波書店　まえがき　P2）

野上のこの願いはついに戦争に阻まれてしまったが、彼女が後日取材を受けた時におっしゃった通り、この実感は強く作用しているので、その戦争の本質を彼女にみあやまらせなかった、いい方を変えれば、当時の軍部の行動に対して初めから否定的にさせた。

その後、野上の中国に関わる作品はどんどん発表された。例えば、昭和十一年（一九三六年）に随筆「五、六年の彼の故国を」を「文学案内」（「魯迅の死を悼む」）に発表。昭和十三年（一九三八年、当時五十三歳）一月、感想文「神のみぞ知る」（しなはどうなる？）を「改造」に発表。

野上弥生子は随筆「私の信条」の中で、「自分の政治への疑い、また戦争に対する自分の生理的に近い戦慄と恐怖は母譲りのものらしい」（『野上弥生子随筆集』P249　竹西寛子）と書いた。この生まれつきの反戦的な感情を持ちながら、昭和十二年（一九三七年）のお正月、野上は朝日新聞に以下のように書いた、

神聖な年神さまにたったひとつのお願いごとをしたい。今年は豊作でございましょうか、凶作でございましょうか、いいえどちらでもよろしゅうございます。コレラとペストが一

緒にはやってもよろしゅうございます。どうか戦争だけはございませんように。

残念なのは、同年の7月7日、盧溝橋事件が起こって、戦争が始まった。翌年、夫の豊一郎は「能の研究」で文学博士になり、法政大学文学部名誉教授となった。10月、弥生子は日英交換教授として渡欧する豊一郎に同行して渡英。その旅行の途次、野上弥生子は上海と香港をのぞき見たが、当時日中の関係はすでに不幸な状態にあった。彼女は上海附近に見た爆撃の惨状、と上海のある公園に出かけた時出会った彼女たちを目にするや否や――軍服の人も交っていたのではあるが――何か怖いものが現れたかのように、急にどこかに隠れてしまった幼稚園の子供たちのことは忘れないと『私の中国旅行』のなかで詳しく描いた。昭和十六年、彼女は「若き友へ」「しなにいる人へ」を甲鳥書林に発表した。翌年、紀行文『朝鮮・台湾・海南諸港』を豊一郎と合著で拓南社より刊行した。

野上の中国の姿が出てくる作品は随筆、紀行文のみならず、小説の中でもよく現れた。代表的な例として、『迷路』という作品をあげたいと思う。『迷路』は左翼運動に身を投じて転向した良家の息子菅野省三を主人公に、出身の異なる友人たちを配して、日本ファシズムの時代を苦渋にみちて生きた青年像を描きつつ、時代を動かした支配層の生活と思想をも作者の筆は精緻にとらえる。昭和10年から敗戦直前までの社会を重層的に描くことに成功した骨太い大長篇小説である。『迷路』の第六部はその大半が、中日戦争末期の中国大陸、徴兵されて送られた省三に関する叙述からなる。省三のまわり、二人の中国人が登場した。馬夫の永生と横浜育ちの陳喜平である。「日本軍」から見れば二人は敵対する国の人間であるが、省三の眼には、二人はただの敵同士ではなく、彼らに対して、自分の理解を示した。結末は、野上と省三が正義のための戦争とはいえ、「戦争」という事実は変えられない、人を殺すものである以上は認めがたいと認識して、ついに脱走したことである。そういう結末は「通俗小説的で」、「嘘めいている」というように批判されることもたまにあったが、ここで作者である野上の戦争反対の態度が垣間見ることができるだろう。

『迷路』の初稿の段階における中国についての認識は荒正人との対談で、野上は「百合子さんの紹介で、延安やなんかの経験のある人に会いたいといって、二人ほど来てもらいました。それで戦地のことだとか、脱走のことだとか、いろいろ聞いて見た」と述べた。中国に行く前、野上はすでに中国のことについて深い興味を持って、中国人と交流しはじめた。

野上弥生子の中国旅行

『迷路』完成の翌年の一九五七年の夏、もう七十四歳の高齢の野上弥生子は中国作家協会の招きに応じて、中国を訪れた。「この日から私は北京を所有し、北京は私を所有した」という記述から、北京についた時の野上弥生子の興奮さが分かった。40日間にわたる旅で、延安は最後の目的地であるが、「延安紀行」は『私の中国旅行』という本の半分ほど占めた。延安に行くことも野上の「古くからの希望だ」、野上弥生子は本の中で書いたように、中国を訪ねる折があったら、延安に行ってみたいとはかねて考えていた。これはずっと以前に、エドガー・スノーの『中国の赤い星』を読んだ頃の影響で、正直に言えば、思想的であるより興味のほうが強かった。最近では、私の作品に関係もあるし、今度の旅行で、古くからの希望が叶えられるものなら、という願いが新たにされた。広州、北京、大同のほかに、延安にもいろいろなところを廻った。黄陵、茶鋪、廃都から、楊家嶺、王家坪、女たちの洞窟まで、中国の農民小説の中の描写で知っているのみで、目にするのは初めてのものを

子供らしい喜びでいっぱい体験した。この旅によって、野上は中国独自の文化を体験しただけでなく、中国人の生活及び中国人の心もよく理解しただろう。中国人の労働する姿を見た後、野上は、「今日までの中国の幾千年の長い苦しい時代、その苦しみはまた、誰よりも重く農民に背負わされていたのに、彼らは超人的な辛抱強さで耐え抜いたばかりでなく、いよいよそれを反ね落す日が到来した時、真っ先に英雄的に立ち上がらせた逞しい力は、彼らの根源である大地の底から、あの呼吸を通じて摂取したものだと見られないだろうか」としみじみと語った。

また、野上が中国帰国した後、より一層中国のことに深く関心を寄る。昭和 46 年、野上は文化勲章を受章した。大分新聞社の記者が野上弥生子に会いに行った時、弥生子は受賞決定と同時に入った中国の国連加入ニュースの方に熱中していたそうで、専らこれを話題にしたという逸話がある。

終わり

女性文学が注目されつつあるうちに、漱石の唯一の弟子たるに恥じない人であると平野謙に褒められる作家としての野上弥生子についての研究もだんだん盛んになった。野上の随筆、小説及び紀行文などの一連の作品の中で、野上なりの中国像はよく出てきた。本稿はそれらの作品の分析を通して、野上の中国との関わりを解明した。小学校時代、中国の『四書』を少し勉強した。50 歳から、初めて中国の台湾まで足を伸ばしました。その時から、中国に関する作品がどんどん発表された。1937 年 10 月、夫と渡英する途次、上海と香港をのぞき見てきて、上海附近の爆撃の惨状を見た後、中国についての文章を発表するとともに、夫と『朝鮮・台湾・海南諸港』という本を出版した。大作『迷路』を書いた時、中国留学生との交流、中国の情勢に関心を持っている。戦後、中国作家協会の招きを受けて、中国の延安まで行って、中国人の生活を自分の目で見られた。中日両国親善、友好の願いが一層強まるようになった。今中国に野上作品の中国語版の訳本と野上の中国との関わりについての研究はほとんどないので、中国人にあまりよく知られていないことが、悔やまれると思う。これからも野上弥生子の作品を読み、野上弥生子研究をつづけることによって、中国における野上弥生子の紹介にわずかでも力になれば幸いである。

（指導教員：岩田康之教授）

参考文献

1.『迷路』　野上弥生子　1999 年 5 月 13 日　第 12 刷発行　岩波文庫
2.『私の中国旅行』　野上弥生子　昭和 34 年 2 月 17 日　第 1 刷発行　岩波書店
3.「迷路」を終って(対談)　野上弥生子　荒正人
4.『野上弥生子研究』渡辺澄子著　昭和 44 年 12 月 10 日　八木書店
5. 野上弥生子『迷路』における「中国」――第六部を中心に　陳祖蓓　1993 年 3 月　『都大論究』　30 号
6. 野上弥生子のリアリズム――『森』を中心に　伊藤發子
7. 野上弥生子作『迷路』――改作の問題を中心に　伊藤宇太子
8. 野上弥生子と西欧　榎木義子

韓日中複数形自称詞比較研究
― 私たち、우리、我们を中心に ―

黄　恵真

１．はじめに

日本語と韓国語は語順が似ていたり、類似した単語を用いたりすることがあるため、韓国人の日本語学習者が作文を書く際に、母語である韓国語の干渉により誤った表現をすることが少なくない。また、これまで日本語教育に関する研究の中では、韓国人日本語学習者の人称詞についての研究はあまり見られない。これは、韓国人日本語学習者において、文法や他の言語学習に比べ、人称詞使用に関する習得はそれほど難しくないと認識されているからだと考えられる。留学生が書いた作文を見ると、例えば、「×要素たち」「×努力たち」といった誤用がみられることがある。特に、韓国人日本語学習者は、私たちを多用することがよくあり、他人に対して話す時にも「私たちのお母さん」のような言い方をすることがみられる。そして、各国語版の同じ小説やドラマなどを見ると、日本語版に比べて韓国版では、우리ウリ(私たち)という複数形自称詞を明示する例が多く、これから行う調査でも同じような結果が見られるのかを注目してみたい。

また、専攻である中国語との比較も加えて、各国の母語話者に対しアンケート調査を行った。

三つの言語での複数形自称詞～私たち、우리(ウリ)、我们（ウォメン）を中心とした使用実態を考察し、その頻度差と用法の相違を明らかにすることが本研究の目的である。

＜私たちの表記方法＞

日本語：私たち（あたしたち、僕たち、僕ら、俺ら、俺たちを含め）

韓国語：우리 ウリ

中国語：我们（咱们）ウォメン（ザンメン）

２．先行研究

先行研究では、まず鄭惠先(2002)が文学作品と意識調査の分析結果に基づき、日本語と韓国語の人称詞の使用頻度差を論じている。韓国語に比べて日本語では、人称詞を明示するという例が少なく、両国語版の小説の中から自称詞と対称詞の総出現数を調べたのが表１である。分析資料として日本語と韓国語の両言語で書かれた現代小説を利用した。日本の小説５冊とそれの韓国語翻訳版５冊，韓国の小説４冊とそれの日本語翻訳版４冊，計 18 冊の小説を分析対象とした。これらの小説の中の会話文から人称詞が用いられている文を取り出し，両言語の原作とその翻訳版に現れる人称詞を同一箇所において比較した。

表１両国語版の人称詞の総出現数　　（原作版/翻訳版）

	単数形自称詞	単数形対称詞	複数形自称詞	複数形対称詞	合計
日本語版	1517 （787/730）	1070 （487/583）	226 （73/153）	91 （21/70）	2904 （1368/1536）
韓国語版	1728 （908/820）	1187 （713/474）	298 （186/112）	95 （75/20）	3308 （1882/1426）

このように、同じ内容の小説でも，両国語版の間には出現数に差が見られるということがわかる。とりわけ，単数形自称詞と複数形自称詞において 1517 と 1728，226 と 298 でかなりの頻度差があり，日本語に比べ韓国語の方で人称詞が多用されていることが明らかである。

3．調査概要

調査は、日常生活の中よく私達の意味を表している文章をいくつか選び、調査場面やアンケートを作り、韓国人、日本人、中国人にそれぞれ２０人を対象として行った。

＜調査方法＞

調査期間：2014 年　6 月

調査対象：日本語、韓国語、中国語それぞれの母語話者２０人の合計６０人、男女別とインフォーマントの年齢層は現在大学生に限定し、18 歳―29 歳を若年層としてまとめたものが表３である。

表３大学生(若年層)男女別インフォーマントの人数

		大学生（若年層）
日本	男性	１３
	女性	7
	合計	２０
韓国	男性	4
	女性	１６
	合計	２０
中国	男性	8
	女性	１２
	合計	２０

調査地域：日本語の母語話者に対する調査は東京を中心とした関東地域内の大学生に行われ、韓国語と中国語の母語話者の場合、特に地域に限らずそれぞれソウル方言、普通話（いわゆる標準語）を基準にして大学生に行った。留学生の場合、日本滞在経験有無を例外の条件としていない。

質問１

あなたは親友である関口さんを食事に誘う時どのような言い方をしますか。

(私たちの他にあたしたち、僕たち、僕ら、俺たち、俺らなどを使っても結構です。)

１．お腹空いたね、私たち何か食べない？/우리뭐 먹지않을래?/咱们去吃点什么吧。

２．お腹空いたね、一緒に何か食べない？/같이뭐 먹지않을래?/一起去吃点什么吧。

３．お腹空いたね、何か食べない？/뭐 먹지않을래?/去吃点什么吧

４．お腹空いたね、私たち一緒に何か食べない？/우리같이뭐 먹지않을래?
/咱们一起去吃点什么吧。

５．他の言い方(　　)

質問２

友達に家族を紹介する時あなたはどのような言い方をしますか。

(私たちの他にあたしたち、僕たち、僕ら、俺たち、俺らなどを使っても結構です。)

1.私たちのお母さんは優しいよ。/우리엄마는 자상해./我们的妈妈人很好。

（お母さんの他にお父さん、お兄ちゃん、お姉ちゃんを使っても結構です)

2. うちのお母さんは優しいよ。

3.お母さんは優しいよ。/엄마는 자상해. /妈妈人很好。

4. 私(自分)のお母さんは優しいよ。/나의엄마는 자상해./我的妈妈人很好。

5.他の言い方(　　我妈人很好。　　)

質問３

あなたは配偶者である関口さんとこの間あった自分の結婚式の参加者について話している時どのような言い方をしますか。

(私たちの他にあたしたち、僕たち、僕ら、俺たち、俺らなどを使っても結構です。)

1.私たちの結婚式の時さ、タンさん来てたよね？/우리결혼식때말이야 탕씨왔었지?

我们结婚的时候 Mr.thanh 来了吧?（私達の他にあたしたち、ぼくたち、ぼくら、おれたち、おれらなどを使っても結構です)

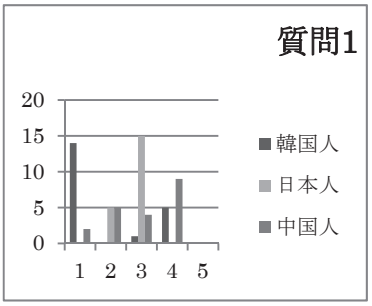
2.結婚式の時さ、タンさん来てたよね？/결혼식때말이야 탕씨왔었지?

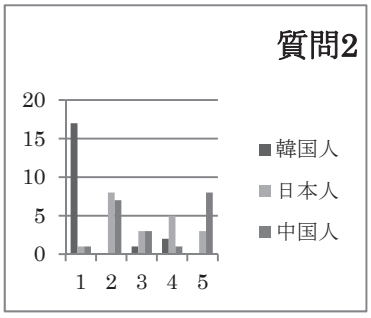
结婚的时候 Mr.thanh 来了吧?

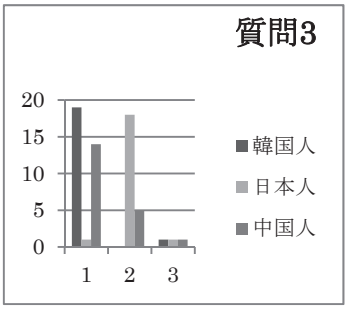
3.他の言い方(　　)

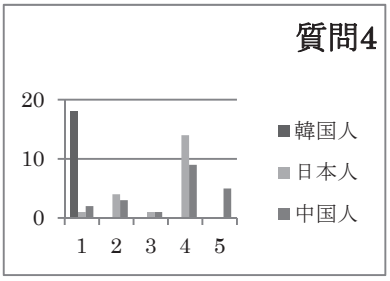
質問４
あなたは留学に来ていて、同じクラスの外国人友達に自分の国を紹介する時どのような言い方をしますか？
(私たちの他にあたしたち、僕たち、僕ら、俺たち、俺らなどを使っても結構です。)
１．私たちの国では、美人が多いです。/우리나라에는 미인이 많습니다.
/我们的国家有很多美女。
２．私(自分)の国では、美人が多いです。/나의,저의나라에는 미인이 많습니다.
/我的国家有很多美女。
３．国では、美人が多いです。/나라에는 미인이 많습니다.
/国家有很多美女。
４．日本では、美人が多いです。/한국에는 미인이 많습니다.
/中国有很多美女。
５．他の言い方(　　)
質問５
あなたは関口さんと同じ部屋に一緒に住んでいて、二人の友達であるヘンドラさんが遊びに来ました。もう夜遅いので、ここで泊まっていいという時どのような言い方をしますか？
(私たちの他にあたしたち、僕たち、僕ら、俺たち、俺らなどを使っても結構です。)
１．私たちの部屋に泊まりなさいよ。もう夜遅いし。/우리방에서 머물다가 밤도 늦었는데
/你今晚就住我们这儿吧。都这么晚了
２．私と関口の部屋に泊まりなさいよ。もう夜遅いし。/나랑세키구치의 방에서 머물다가 밤도 늦었는데/你今晚就住我和关口这儿吧。都这么晚了。
３．うちの部屋に泊まりなさいよ。もう夜遅いし。
４．部屋に泊まりなさいよ。もう夜遅いし。/방에 머물다가 밤도 늦었는데
/你今晚就住这儿吧。都这么晚了。
５．他の言い方(　　)
質問６
次は、同じ寮に住んでいる友だちに寮から駅はどの位離れているのか確認するため、「駅は私たちの寮から徒歩５分位だよね？」などの質問に対し５段階評価で答えてもらう。
駅は「私達」の寮から徒歩５分位だよね？
(私たちの他にあたしたち、僕たち、僕ら、俺たち、俺らなどを使っても結構です。)
１．とても自然な会話　２．普通　３．ややわざとらしい
４．不自然　５．絶対言わない
上の質問に４と５で答えた方のみ答えてください。
文章中に、「私達」という言葉が不自然もしくは絶対言わないということですが、ほかの言い方としてはどのような言い方をしますか？
１．駅は寮から徒歩５分位だよね？
２．駅はうちの寮から徒歩５分位だよね？
３，他の言い方（　　）

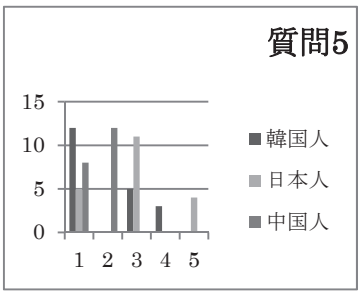
4. 調査結果と考察

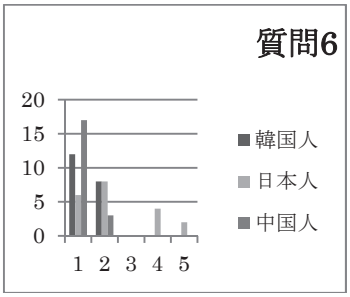












これらの結果のように、家族など自分が所属しているグループを話題にする発話において、韓国人話者は指示対象を修飾する自称詞を用いることが多い。つまり、日本人と中国人話者に比べ「私たち」を用いる文が多く使われ、これは母語干渉の一例である。とりわけ質問４に対し、韓国人話者の 90%が「私たちの国～」を選んだのに対し、日本人や中国人話者の場合それぞれ 5%、10%であり、韓国人の方が、複数形自称詞を用いることが比較的に多いことが分かった。日本人話者の場合は、単数形自称詞が用いられるのが普通で、韓国人、中国人話者に比べて複数形自称詞が用いられることはほとんどない。ただし、韓国語での複数形自称詞の用法にもっと多く対応している日本語訳は質問５に対する答え［うちに泊まりなさいよ］と、質問２の［うちのお母さんは優しいよ。］などの「うち」であることが分かった。一方、中国人話者の場合、答えが偏っている韓国人話者と日本人話者の答えに比べ状況や相手により複数形自称詞の用法が変わりやすいことが分かった。とりわけアンケートを取る際に、質問１に対して相手との仲良さや性別について聞かれることもあり、四つの答えそれぞれが場合によって全部あり得ると言うことが分かった。

5. 結論と今後の課題

本論では、韓国語、日本語、中国語の複数形自称詞の私たちを中心に使い方について調査し、当初の予想通りの結論を得ることが出来た。韓国語は、複数形自称詞を明示することが多いのに比べ、日本語はほとんど明示しない。中国語は場合によって使い方が変わることが分かった。今後の課題としては、インフォーマントの人数が 20 人ずつで少なかったため、最終発表まで各国 30 人ずつ合計 90 人を目指しアンケートを取りたい。また、今回の調査は韓国人と中国人に対し女性のインフォーマントの方が比較的に多かったため、比率を合わせてアンケートをまとめたい。

最後に、日本語の「うち」に対する疑問が残っているので、「うち」に最も近い韓国語、中国語表現を調べてみたい。

（指導教員　岡　智之 教授）

注

鄭惠先(2002)『日本語と韓国語の人称詞の使用頻度 ： 対訳資料から見た頻度差とその要因。』北海道大学日本語教育、114：30－39　p2－3

(2005)『日本語と韓国語における人称詞の使用実態：アンケート調査の分析結果から見る頻度差と用法の相違。』北海道大学計量国語学、23(7)：333－346　p3－7

高分解能分光用外部共振器半導体レーザーの開発

Lee Keum Joo

1.研究目的

植松研究室では半導体レーザーを光源として原子のレーザー分光を行っている。
半導体レーザー（別名レーザーダイオード）は高効率、小型、長い寿命、波長の可変範囲が広い、半導体物質の配合によって様々な波長を選択可能などの利点により、多くの分野で応用されている。

原子のレーザー分光をするためには、原子の共鳴波長に合わせ、スペクトルの線幅を狭め、発振波長を安定させる必要がある。そこで広い波長可変領域と安定性が期待でき、また線幅を縮小させることが可能な外部共振器型半導体レーザー(ECLD)を本研究で作成する。

2.外部共振器型半導体レーザーの構成

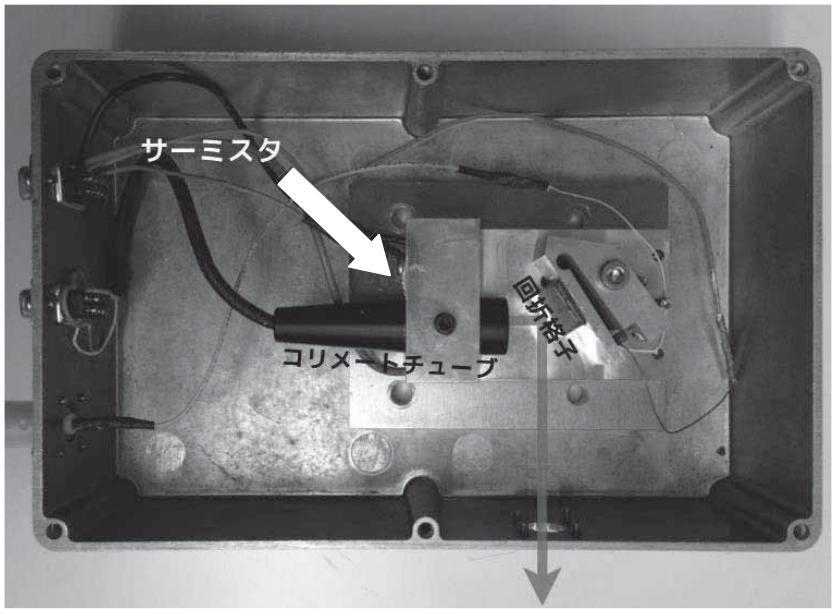


Fig. 2.1.1 外部共振器の構成

2.1 半導体レーザー

半導体レーザーは光子の誘導放出を用いた増幅器の中で pn 接合の順方向に電流が流れる時光子は増幅され発光する。本実験でファブリペロー型半導体レーザー(TOPTICA #LD-0860-0080-AR-1)を使用した。

ファブリペロー型半導体レーザーは対向している２枚の鏡の中で光が閉じ込めて増幅された光が出る原理である。本実験で使用した素子は中心波長 868nm、波長域 840nm～875nm、電流値は 30mA である。また、注入電流 130mA において 80mW で発振する。

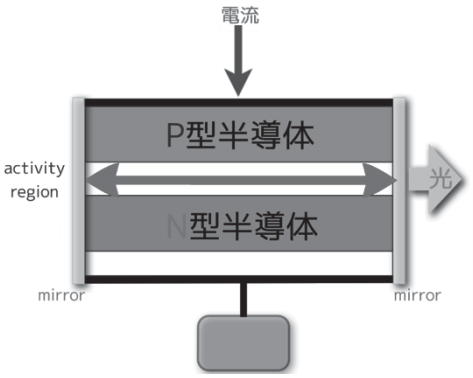


Fig. 2.1.2 ファブリペロー型半導体レーザー断面図

2.2 ECLDの動作原理

ECLDは、広い波長可変領域と非常に狭い発振線幅及び、安定的な発振波長などの特性がある。その構造によって外部に回折格子を置く方法として、Littrow配置とLittman配置がある。

Littrow配置はレーザーの1次の回折光をLD素子に直接戻し、回折格子とLDの端面で共振器を構成している。回折格子の0次回折光を出力光として利用する。

Littman配置は回折された1次光を外部ミラーに反射させ外部ミラーとLDとの端面で共振器を構成している。回折格子の0次回折光を出力光として利用する。

本研究では回折格子による入射角と回折角が同一し、構造が簡単な Fig. 2.2.1に示すLittrow配置とした。

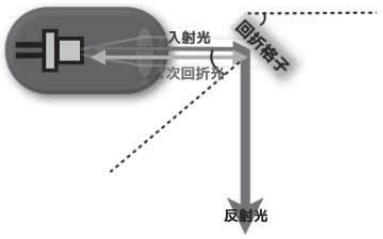


Fig. 2.2.1 Littrow 型ECLD

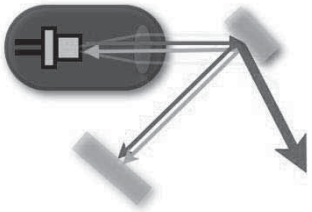


Fig. 2.2.2 Littman 型ECLD

2.3 回折格子

回折格子は金コーティングのホログラフィック回折格子を用いて広い波長領域の光(700nm以上)に対する反射率を高めることができる。ホログラフィックの表面は

Fig. 2.3.2に示すようにsin波形の溝が掘られている(d=1/1800mm)。

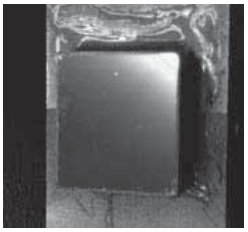


Fig. 2.3.1 金コーティング

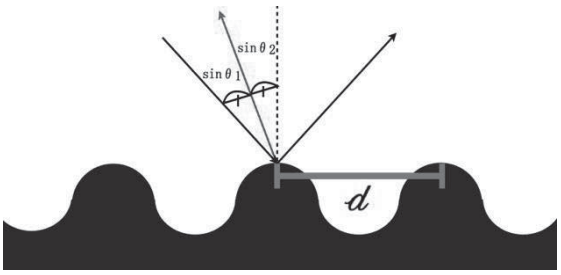


Fig. 2.3.2 ホログラフィック回折格子

レーザー光が回折格子にθ_1の角度で入射しθ_2の角度で回折する場合、光が干渉し発振する条件は以下のようになり、それをグレーティング方程式とする。

ただし、mを干渉次数、dを格子定数、λを波長とする。

$$d(\sin\theta_1+\sin\theta_2)=m\lambda \quad (1)$$

2.4 Littrow配置の外部共振器型半導体レーザー

本研究では外部共振器をFig. 2.2.1に示すLittrow配置とした。Littrow配置は、入射角と1次回折角が同一になる条件を満足させる場合として、回折光に対する帰還用反射鏡を別途に使用しないので比較的に簡単な構成である。

Littrow配置の外部共振器型半導体レーザーの共振条件は以上のグレーティング方程式(1)に入射角と1次回折角が同一な条件である $\sin\theta_1=\sin\theta_2$を代入して、
また、外部共振器式により選択される波長としての式(2)を満足させる波長に
表すことができる。

$$2d(\sin\theta)=m\lambda \quad (2)$$

回折格子の角度を変わることでレーザーの波長も変化されるということが式(2)から分かる。これは回折格子の回転より広帯域の波長範囲から欲しい波長を選ぶことができ、比較的に簡単な動作より波長の連続可変が得られるメリットを示している。

2.5　温度制御機構

半導体レーザーにずっと電流が流れていると、レーザー素子の温度は上がる。
半導体レーザーはこの温度の変化によっても波長が変わる特性がある。しかし、安定し

た発振を得るためには、温度も安定させる必要がある。このため、サーミスタで温度を測定し半導体レーザーの底に敷いてあるペルチェ素子で温度の制御作業に行う。
レーザーの温度を測定するためのサーミスタはTOHORLABS TH10Kを利用した。温度コントローラーを用いて電気抵抗の変化から温度を測定することができる。

$$1/\boldsymbol{\tau}=3.3540170\times10^{-3}+2.5617244\times10^{-4}\times\ln(Rt/R_{25})+2.1400943\times10^{-6}\times\ln(Rt/R_{25})^{2}$$

$$-7.2405219\times10^{-8}(Rt/R_{25})^{3} \qquad (3)$$

ただし、$\boldsymbol{\tau}$の単位はKelvin(K),R_{25}は10kΩ, Rtは測定した電流の抵抗値となる。

Fig. 2.5.1 サーミス

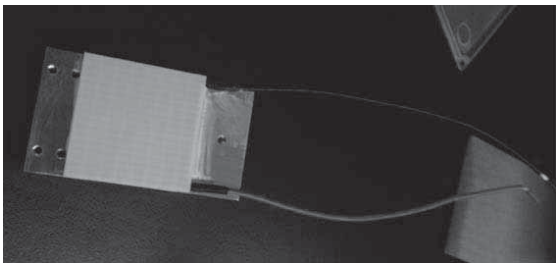


Fig. 2.5.2 ペルチェ素子

3.現在の問題点

半導体レーザーは比較的に広がり角が大きく、光を平行にするコリメートが必要である。現在、コリメートに使用するレンズの焦点距離が合わず、コリメートが出来ていない。

そのため半導体レーザーの基本特性を測定し、作成したECLD原子の分光用光源として適当かを確認することが出来ない問題がある。

4.今後について

- 半導体レーザーの基本特性を測定する。
- 原子の共鳴波長に合わせ、ECLDを発振させる。
- 実験可能なスペクトルの線幅であることを確認する。
- 発振波長の安定性を測定する。

(指導教員：植松晴子准教授)

注：

1 HITZ·EWING·HECHT『Introduction To Laser Technology3e』

2 Wenxian Hong 「Design and Characterization of a Littrow Configuration External Cavity Diode Laser」California Institute of Technology

3 早坂美希「高分解能分光用外部共振器半導体レーザーの開発」卒業論文 東京学芸大学

日本の小学校の美術の教科書研究

洪　廷玟

１．はじめに

美術教育を専攻する学生として母国以外の国でどのように美術教育が行われているかは非常に興味深いテーマであった。その点から考えてみると、日本への交換留学は、韓国以外の他の国の教育現場を直接体験することができる良いきっかけだった。特に日本の教育は、韓国の教育に多くの影響を与えたりしたし、また、自分なりには、日本の繊細な国民性が美術教育にどのように表れるかも知りたかった。今回の図画工作教科書の研究が、日本の美術教育を理解し、長所を学ぶきっかけとなり、ひいては韓国の美術教育を新たに眺める機会になると思う。

２．日本の図画工作教科書

２．１小学校図画工作教科書の基本的な構成

日本の小学校教育は文部科学省の学習指導要領（平成20年3月告示）に基づいて行われている。教科書も学習指導要領に基づいて作られており、学習指導要領に記載された目標や内容、指導計画などを反映して作る。図画工作科目の場合は、内容において大きく表現と鑑賞の2つの領域に分かれており、より具体的に造形遊び、絵、立体、工作、鑑賞の5領域に分けられる。

①造形遊び ： 平成元年度の学習指導要領から重要視されている表現活動である。身体の感覚器の発達も促すもので、材料への理解を深める全身活動が主体となる。特に低学年では生活科との連動が図られ、土地ならではの素材を得ることもできる。具体的な活動としては、砂遊び（砂山つくり、トンネル、型抜き）・水遊び（水のお絵かき、船作り、色水遊び）・シャボン玉・落ち葉の造形などが低学年で行われる。中学年・高学年になると大掛かりなものとなり、かつては男子の典型的な遊びだった「秘密基地作り」を意図的に取り込むことがある。また社会科の歴史教材と組み合わせて竪穴式住居や貫頭衣の再現、実寸大の奈良の大仏の描画に取り組むケースもある。伝統工芸との連携を図り、藍染・紙漉き・焼き物作り・一刀彫などの体験活動に発展させることもある。

②絵 ： 立体彫塑の大量導入に伴い、絵画・版画は減少傾向にある。その一方、歯の衛生週間・交通安全運動・火災予防週間・愛鳥週間などの行事と連動したポスター製作や読書感想画などと連動し、根強い人気がある。低学年の間は、実際に目で見たものを表現する段階に達していない。大の字に四肢を広げた状態で「走っている」状態を表現していたり、正面向きの顔から鼻を横に長く伸ばすことで「横顔」を表現したりする観面混合の状態にとどまっていることがある。また、太陽は赤・空は青・雲は白と、色もパターン化されている。さらに陰影をつけるにも技量が到達していない。これらは図工のみならず、体育や

理科による感覚器の発達や手の巧緻性の発達によって改善される。絵画表現活動はそれを実践的に促すものである。
③立体 ： イメージの立体的表現領域。
④工作 ： 〔紙細工〕低学年の平面的な切り紙遊びから始まり、折り紙や箱作りなどの立体造形へと発展する分野である。この中で、はさみ・小刀などの工具、のりをはじめとする接着剤の導入が図られる。同時に表面へのデザインを付加することで、絵画分野との連動を図る。〔粘土細工〕一般的に油粘土による反復した立体造形から入り、紙粘土など乾燥とともに作品の形が固定されるものへ発展していくが、益子・瀬戸・有田などの窯業が盛んな地域では、伝統文化の継承も兼ねて陶土を用いた造形に踏み込んでいる地域もある。立体造形に遷移するまでに、重心や強度を意識したり、芯を入れるなどの技量の向上を図る。〔木工・金工〕美術分野よりも技術分野に特化したもので、拾った木片をそのまま接着する活動から始まり、鋸を使った加工、さらに高学年になると糸鋸を用いた曲線を活用した作品へと進化していく。金工は針金の屈曲を用いた簡単なもので、鉄板の折り曲げ加工などの複雑なものは、中学校の教科「技術」での学習になる。これらの活動の中で、鋸・金槌・糸鋸・ペンチなどの簡単な工具の使い方を習得する側面を持つ。
⑤鑑賞 ： 児童の特性として、表現する喜びが先行する傾向がある。芸術・技術の消費者として成長するために、鑑賞活動が行われる。発達段階に応じて、自分の作品から友達の作品、やがて先人たちの芸術作品へと鑑賞の対象を広げていく。自分の作品に関しては、製作時の思い出や作品の感想を振り返らせる手段が用いられる。友達の作品では、優劣の競い合いにならないことを前提として、優れた工夫や観点に気づかせることを主眼とする。先人の作品については、模写をして相違点に気づかせる手段もとられている。鑑賞の場としては、高学年であれば美術館の見学が行われることもある。鑑賞の対象が身近な人の作品であるため、全学年を通して夏休みの作品展やポスター・読書感想画の掲示や教室展示が主な場面である。教室掲示は書写作品と並んで定番となっているが、児童の関心が長く続かないため、早めに差し替えることが留意される。
また、学習の際に必ず教えるべき部分を〔共通事項〕に定めて教科書を作るときにも共通事項が反映するようにした。図画工作の科目の〔共通事項〕（5,6年生群）は、次のとおりである。
（1）「A表現」及び「B鑑賞」の指導を通して、次の事項を指導する。
ア 自分の感覚や活動を通して、形や色、動きや奥行きなどの造形的な特徴をとらえること。
イ 形と色などの造形的な特徴を基に、自分のイメージをもつこと。
平成26年現在、小学校図画工作教科書を発行する出版社は、開隆堂と日本文教2ヶ所で、東京書籍は、25年を最後に教科書出版をやめた。

２．２　開隆堂と日本文教の比較

出版社別に教科書内の5領域の割合を調査した結果、開隆堂は ①絵 ②工作 ③造形遊び ④立体 ⑤鑑賞の順で、日本文教は ①絵 ②工作 ③立体 ④鑑賞 ⑤造形遊びの順だった。結果によると、出版社に関係なく、絵や工作パーツは、小学校図画工作の科目で中心的な領域とすることができる。学年別の各領域の配分の変化から見られる特徴は次のとおりで

ある。①絵や工作は、図画工作の主な領域　②造形遊びの減少　③鑑賞と立体領域の増加。

絵と工作は表現の主な手段であり、これは小学校の図画工作が最終的には表現の方法を身につける美術本来の目的を重視している点を示す。また、造形遊びの減少は、作品制作を目的とせず、周囲の環境と材料に触れ会いを重視した造形遊びから抜け出して一つの完成された作品で自分を表現することを重視し始めたということを示す。一方、鑑賞領域の増加は、以前に表現活動と鑑賞の明確な区分を設けず、表現と鑑賞が一緒に行われたものと比べて鑑賞活動の単独の領域を増やして、より体系的鑑賞活動を目指していることを示す。

３．韓国の初等学校の美術教育

３．１　美術科教育課程

日本の文部科学省から提示された小学校学習指導要領と同様に、韓国の教育科学技術部で告示した学習に関する指導方針で、現在は第7次教育課程（2009年改正）である。その中で、美術科目の内容体系を見てみると、大領域は、体験、表現、鑑賞の3領域で、小領域は（体験）知覚、疎通（表現）主題表現、表現方法、造形要素と原理、（鑑賞）美術史、美術批評の7領域に分かれている。そして、各領域ごとの内容システムの詳細については、次のとおりである。

日本	大領域	小領域
—	体験	·知覚 周辺の対象や現象、自分の特徴を発見し、様々な方法で表現する
		·疎通 視覚文化の疎通方式を理解し、活用する
表現	表現	·主題表現 体系的な発想を介して主題の特徴と雰囲気を効果的に表現する
		·表現方法 様々な表現方法の特徴を理解し、効果的に表現する
		·造形要素と原理 造形要素と原理の特徴を理解し、効果的に表現する
鑑賞	鑑賞	·美術史 美術の時代、地域の特徴を調べて文化的伝統を理解する
		·美術批評 美術批評活動の過程と方法を身に付ける

３．２　内容体系の比較

韓国と日本の美術や図画工作教科書を比べて目立つ点は、以下のとおりであった。①図画工作では、材料や場所の特性を重視し、その特性にふさわしい表現を身につけることを優先とする。一方、韓国の場合には、表現方法や造形要素により集中する傾向がある。②韓国の教科書には日本の造形遊びパーツに対応するパーツがない。自然の中で、点、線、面などの造形原理を発見するパーツがあるが、ごく少ない部分を占めており、具体的な制作活動につながらない。③色のパーツ：韓国の場合、明度と彩度の原理を身につけ、それを活用できるようにすることを目的とし、日本の場合は、子供たちが自分の感情に似合う色を選択して、作品を制作することを目的とする。④韓国は日常生活の中のアートに比重を置いている。パートの割り当ておよび例示の作品においても、生活の中で発見できるものが多い。⑤韓国の場合、観察をもとにした作品制作活動が多い。一方、日本の教科書の場合、開隆堂と日本文教どちらでも観察や模写扱うパーツは見えなかった。⑥韓国の教科書では、抽象芸術、アニメーション制作や現代美術など、現在の美術の傾向を扱っている。⑦一方、鑑賞の領域では、伝統美術の割合は韓国の教科書が多く、美術批評のパーツが別々にあった。また、韓国の鑑賞領域には、既成の作家たちの作品の数が多かった（他の部分でも、既成作家の作品を例示とした場合が多い）。また、美術用語の使用を強調した点も目立つ。

４．おわりに

今回の研究をしながら、日本の美術教育は韓国に比べて子供たちが世界をどのように感じるか、また自分が感じたことをどのように再解釈して表現するかを重要視するようだと思った。どちらが良いとは言えないが、日本の美術教育で明らかに目に見える利点は、必ず学ぶべきことだと感じた。次に、それぞれの年齢に応じた発達段階と現在の美術教育における内容構成の適切さを考えてみたい。

（指導教員：正木賢一准教授）

参考文献

1 開隆堂 図画工作 5･6 上、下
2 日本文教 図画工作 5･6 上、下
3 小学校学習指導要領
4 Doosandonga 5･6年 美術教科書
5 Geumsung 出版社 5･6年 美術教科書
6 美術教育課程（教育科学技術部告示第2011-361号）

日本のマスコミの中国報道
―２０１３年の読売新聞を例として―

徐　瑶

1.　本研究の目的

世論は人の価値観と世界観に深刻な影響を与えている。マスコミは人が情報を得る重要なものなので、社会の世論をある程度導いている。国の主要なマスコミを分析することによって、その国の世論がどのようになるかがある程度わかる。

新聞は日本で広く普及している。新聞は載っているニュースのボリュームが多く、持ちやすく、値段が安く、家庭にも配達されるなどの理由で、日本の新聞は広く読まれており、それが世論の動向に深い影響を与えている。

アジアにだけでなく、世界中に重大な影響力を持つ中国と日本は近年、領土や資源などをめぐる問題で、国と国の関係が悪化している。２０１２年に中国で反日運動があった。修復中の日中関係がひどいショックを受けた。このような背景により、日本のマスコミの中国についての報道を研究することはより重要になった。

研究対象である読売新聞は日本の売り上げ第一位の新聞で、2013 年の販売部数は世界最多である。そこで読売新聞は日本人に最も大きな影響を与えていると考えられ、研究の対象に読売新聞を選んだ。

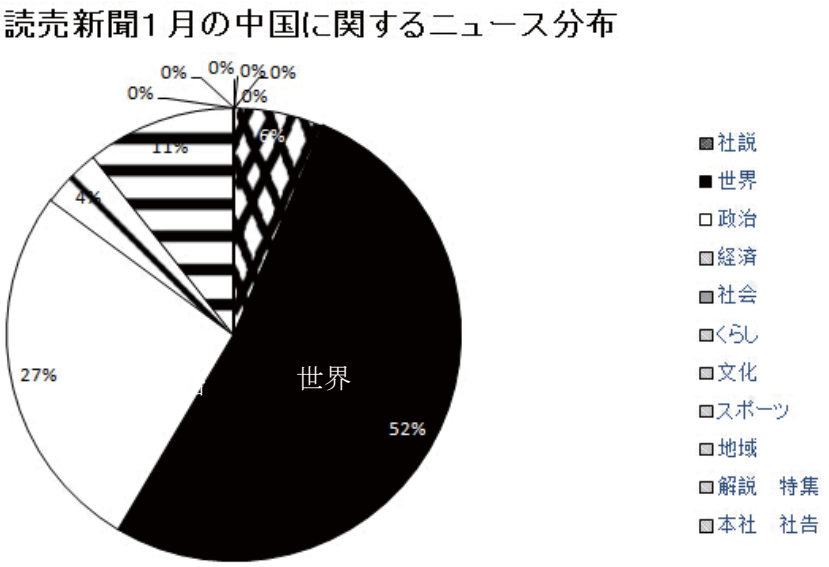
本研究では、まず、2013 年の読売新聞の中国報道を分類して集計した。次に、集計結果を表したグラフを分析し、中国報道の特徴を読み取る。その上で、それらの内容問題点を明らかにする。

2.　読売新聞の中国報道の現状

（1）　2013 年読売新聞の中国報道の実態

①　１月の中国に関するニュース分布

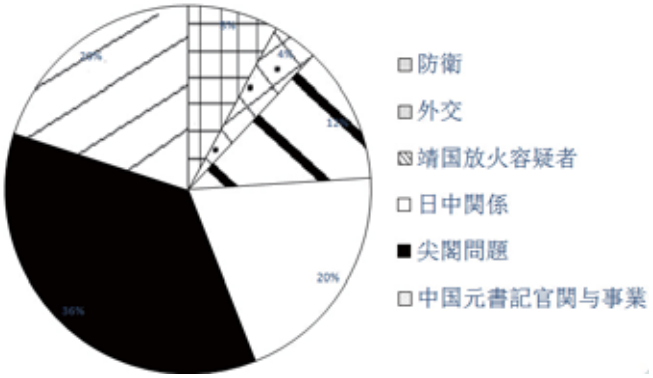
2013 年１月の中国についてのニュースを分析してみると、以下のグラフが導かれる。



中国ニュースについて、「世界」というコラムのニュースが一番多い。「世界」の中のニュースは世界の種々の出来事で、各国の各自のニュースが多い。それは日本とそんなに関係深くないが、たくさんの報道がある。

２番目に多いのは政治で、２７％を占めている。経済はわずか４％である。日本と中国は地理的に非常に近い国で、伝統文化も似ている部分がたくさんある。政治的にも経済的にも深い関わりがあるが、政治に関するニュースは多い一方、経済に関するニュースは少ない。これはおそらく、日中の政治のトラブルが時々あり、政治的には緊張している時もあるからだろう。しかし、日中の経済関係のニュースは少なく、それは日中経済がそんなに緊密でない関係になってしまったのであろうか。そうではなく、今のところ、日中の経済交流は盛んかつ穏やかな状態で、特に大きな問題はないから、経済のニュースも多くないのだろうか。

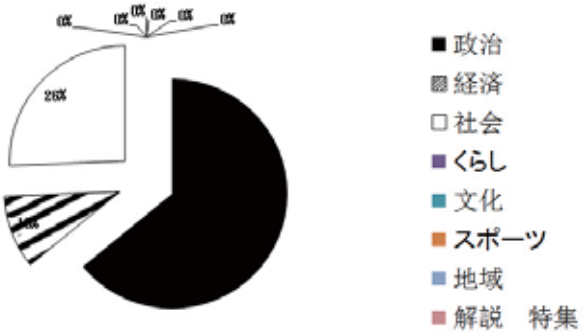
②　１月の「政治」の中、中国に関する各種のニュースの割合



2013 年１月の政治のなかで、中国に関するニュースは防衛、外交、靖国放火容疑者、日中関係、尖閣問題、中国元書記官関与事業にある。

そのなかに、とくに尖閣問題の割合が一番多く、９本があり、３６％を占めている。実は、その９本の中で、重大なニュースや日中問題を難しくするニュースはない。そういうニュースがなくても、尖閣問題のニュースが一番多く、民衆たちが一番注目している。これから見れば、尖閣問題は政治のなかで、一番敏感なところで、最も注意を引いた問題である。

③　１月の日本と関係が強いニュースの分布（社説と世界を除く）

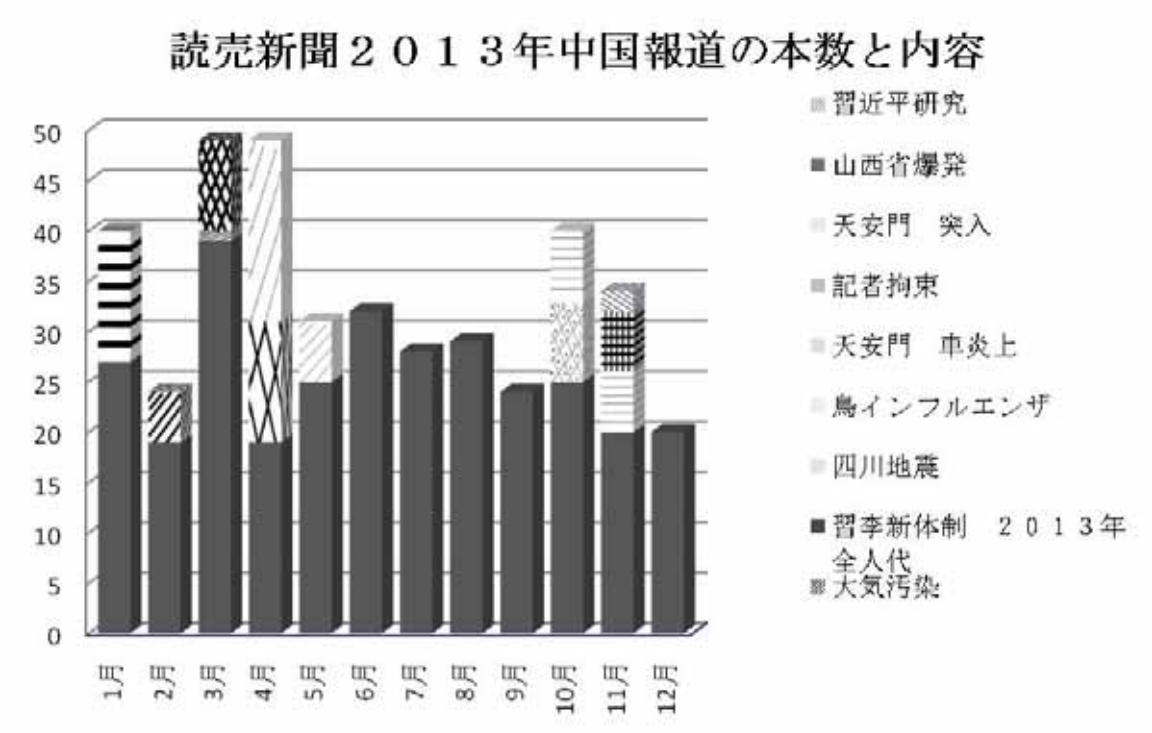


（政治　６４％　　社会　２６％　　経済　１０％）

政治、社会、経済のコラムで、中国に関する出来事がよくニュースになるが、ほかの面においては、中国が日本に影響を与えている出来事はそんなに多くはない。日本人の日常生活、文化、体育、地域ニュースなど、中国の影響はまだ強くない。経済、政治、文化の三つは強い影響を与えることのあるもので、中国は日本の政治と経済にいろいろな影響を与えているが、今の中国は日本文化への影響はほとんどない。今の経済が高速で発展している中国の文化影響力の弱さも見られる。

（２） 2013 年の読売新聞の中国に関するニュース

毎月の縮刷版の「中国」というコラムの中で、ニュースの内容と本数を分析し、以下のグラフを導出した。



このグラフをみると、読売新聞の縮刷版の「中国」というコラムは以下の特徴がある。

1) 2013 年一年間の月平均数は 32.3 本で、時期によって、多かったり少なかったりすることがある。大体毎日、中国のニュースは読売新聞に載るということが分かる。中国の出来事はたくさん新聞に載っていることから見れば、新聞は中国の状態を重視し、中国の出来事は日本にとって重要なニュースのひとつであることが判断される。
2) 最も多いのは３月と４月で、両方とも４９本である。一番少ないのは１２月の２０本で、３月と４月の半分にも及ばない。
3) 中国のニュースは政治と経済に限らず、国内のさまざまなニュースを幅広く報道している。（例）
   a) 賃金未払い「故郷帰れない」　農民工が抗議　春節控え頻発（2013.01）
   b) 河南省の村　豚４１０頭怪死　犬１２２匹も（2013.04）
   c) 大気汚染度　北京は１７位、ワースト１、２位は河北省（2013.04）

4)　中国で大きな事件があったとき、読売新聞の「中国」についての報道が大幅に増える。最も多いのは鳥インフルエンザ（２６本）、四川地震（１２本）。

5)　たとえ中国で大きな事件が発生しなくても、中国のニュースは少なくない。１月から１２月まで、普段の報道は少なくとも１９本（４月）がある。平均数は２５．６本である。日本のマスコミは、中国の大事件の集中報道だけではなく、普段の出来事の報道にも力を入れている。日本の新聞は中国の日常状態を細かく観察している。だから、普段のニュースからの中国に対しての理解を基にして、大事件を報道している。

6)　中国国内のニュースは政治と経済に関するニュースが多い。読売新聞は中国国内の政治と経済の報道に相当注意を払っている。

3.　結論

2013 年読売新聞の中国報道の分析を行い、以下の報道の特徴を導出した。(1) 読売新聞は中国の出来事を重視している。大体毎日、中国のニュースは読売新聞に載ることにより、中国の出来事は日本にとって重要なニュースのひとつである。(2) 政治、社会、経済のコラムで、中国に関する出来事が多いが、ほかの面においては、中国が日本に影響を与えている出来事はそんなに多くはない。(3) 日本の新聞は中国の日常状態を細かく観察している。だから、普段のニュースから中国に対しての理解を基にして、大事件を報道している。(4) 内容は主には客観的な報道だが、肯定的報道が少ない。客観的な事実を記述している記事が多く、主観的な感情を含める用語は滅多にない。しかし、肯定的な報道と否定的な報道の割合の差は大きく、肯定的な報道はほとんどない。

４．後書き

以上の特徴の理由としては、日本の記者報道制度、商業、歴史などの影響があるのである。日本の記者クラブ制度により、ニュースの採取と報道は制限されている。商業的な面で、販売部数を増やすために、新聞の報道は完全に客観的に報道することは難しい。真面目に深く探求するものは少なく、娯楽と情緒的な報道は多くなる。大手企業の広告費への依頼で、報道が大手企業に偏っている傾向がある。歴史の面で、読売新聞自身の従来の伝統としてきた報道の影響もある。今の情勢で、読売新聞の立場、見方、そして中国に関する報道の傾向が根本的に変わる可能性は少ない。

（指導教員：和田正人教授）

参考文献：

１朱湘洋　日本のメディアの中国報道---2003から2008までの読売新聞を例として　修士論文　中山大学　2009年

２　張玉　日本新聞の中国国家イメージ研究　中国伝媒大学出版社　2012年7月

３　劉妍　朝日新聞の2008年の中国報道研究　現代伝媒2009年　第6期　158頁

梶井基次郎文学の諸相
―「病気」「旅情」「闇」を中心に―

蘇　芸

一、研究動機と意義

私は大学院の一年生の時、「日本文学通論」という授業で初めて梶井基次郎と出会った。梶井基次郎の「檸檬」を読んでから、彼の文学に漂う憂鬱と詩情豊かな作風に心を打たれた。其の後、彼の「冬の蠅」などを読んで、だんだん興味を持つようになった。日本に来てから、彼の全集を手に入れて、読めば読むほど感動した。

梶井基次郎は三十一年の短い生涯を、あたかも肉体に火をともして燃え尽くすように、静かに燃焼して煙になってこの世から消えた。残されたのは優れた短編 20 篇といくつかの未完成な作品だけであって、あわせても四十四篇にすぎない。生前はほとんど無名に近く、その境涯は、宿病の結核に冒されて、凡庸な文学青年の像であった。しかし、彼がその命を掛けて打ち込んだ作品が、彼の没後に評価が次第に高くなって、珠玉のように輝くようになった。病者の視線で、処女作の「檸檬」から遺作の「のんきな患者」にいたるまで、梶井は病者であることを逆手にとって、健常者ならうっかり見過ごすような些細なところまでを作品に描いた。梶井は自分の肺結核を材料に、生の極限の姿、死にいたるまでの諸相をみて、考えを続けた。彼の作品から、病者としての憂鬱と旺盛な生命力への追求が感じられる。

梶井の全集を通読すると、「病気」「旅情」と「闇」という三つの角度から書かれた作品が多い。梶井は病気のため、作品に登場した主人公はだいたい病身である。彼の文学は彼の病気と大切な関わりがあるとはいえる。そして、梶井は父の転勤と自分の病気の療養により、いつも転居していた。また、彼は長旅ができなかったが、自分の幻想を通して、日常見慣れた現実の風景を他所に見て、一瞬のうちに他国の町と化したときに現出される「旅情」がよく作品の中で出てきた。他に、梶井の作品の中に、「暗黒の夜の闇」と人間の心の中の闇についての描写も多い。梶井の作品を読むと、この三つの主題がしみじみと感じられる。中国では、この方面についての研究がほとんどないので、研究する価値があると思う。

二、先行研究

日本と中国の梶井基次郎についての先行研究を調べてみたが、今の中国では、梶井基次郎とその作品を対象として研究している資料がとても少ない。僅かな数篇の先行研究があるが、主に梶井基次郎の代表作の「檸檬」を中心にして論じられている。一方、日本では、梶井基次郎についての先行研究が少なくない。手に入れた単行本は五冊で、作家論は大体梶井基次郎の成長経歴と家族、友人との付き合いについて論じて、作品論は大体「檸檬」「冬の蠅」「冬の日」などの単一な作品を中心に論じられている。

三、研究目標

梶井基次郎の生い立ちと作品から、文学の中における「病気」「旅情」と「闇」と言う三つの主題を通して、梶井基次郎の文学諸相を考察したい。

四、研究方法と内容

本研究は主にテキスト研究・実証研究・比較研究を用いて、梶井基次郎の文学諸相を考察した。テキスト研究においては、主として梶井基次郎全集を精読することによって、彼の作品における三つの主題に関する内容を分析する。実証研究においては、梶井基次郎自身が書いた書簡、日記や他の研究者や批評家が彼について発表した論文や評論を踏まえ、自分の論点を支える。比較研究は、梶井基次郎の各時期の作品における文学諸相を比較して分析する。

内容については、以下のとおりである。

全体は「病気」「旅情」「闇」という三つの角度から、梶井基次郎の文学諸相を論じる。本文は五章に分けられる。第一章は梶井基次郎の生い立ちとその文学を概観する。第二章は梶井基次郎の文学と病気の関わりについて論じる。ここでは、まず、梶井基次郎の生きていた時代と肺結核、梶井の肺結核にかかる過程、精神に受ける肺結核の影響などについて論じて、そして梶井の作品における病気を論じる。第三章と第四章では、まずは「旅情」と「闇」の意味を説明してから、「旅情」と「闇」の発見を論じて、最後は作品の中の「旅情」と「闇」を分析する。

五、研究の新規性

中国国内で有力な論文検索サイトである「知網」で「梶井基次郎」についてを検索すれば、博士修士論文・シンポジウム論文・雑誌を含めても、18 篇しか見つからない。しかも大体は「檸檬」を論じたものである。そういう意味でいえば、中国においては、梶井基次郎に関する研究は十分に余地があると思う。それに、本研究は梶井基次郎の単一の代表作品だけにとどまらず全集に触れて総括的に論じるものである。

六、今後の課題

梶井基次郎の文学諸相を追究するためには、今後さまざまな角度から考察する必要があると思う。特に梶井基次郎の文学と自然、音楽などとの関わりについて考察すれば、非常に良い切口になると思う。

七、論文の構成－目次

要旨
キーワード
はじめに
第一章　梶井基次郎とその文学
　第一節　梶井基次郎の生い立ちと作品
　第二節　問題提起
　第三節　先行研究
第二章　梶井基次郎の文学と病気との関係
　第一節　梶井基次郎と肺結核
　第二節　梶井基次郎の精神病理
　第三節　梶井基次郎の作品における病気

第三章　梶井基次郎の文学に漂う旅情
　第一節　梶井基次郎の文学に漂う旅情の意味
　第二節　梶井基次郎の文学に漂う旅情の発見
　第三節　梶井基次郎の作品に漂う旅情
第四章　梶井基次郎の文学に潜む闇
　第一節　梶井基次郎の文学に潜む闇の意味
　第二節　梶井基次郎の文学に潜む闇の発見
　第三節　梶井基次郎の作品に潜む闇
第五章　結論－梶井基次郎の各時期の作品における文学諸相の比較
おわりに
参考文献

八、梶井基次郎とその文学

1901年（明治34年）2月17日、梶井基次郎は大阪市に生まれた。父は宗太郎で、母はひさであった。家族は他に、祖母（宗太郎の母）、祖父（ひさの養父）、姉・富士、兄・謙一がいた。後に三人の弟（芳雄、勇、良吉）と、二人の異母弟妹（順三、八重子）が次々に誕生した。宗太郎は貿易会社の安田運搬所に勤めて、軍需品輸送の仕事をしていた。ひさは明治の女子教育を受け、幼稚園の保母として勤めに出ていたが、日露戦争により宗太郎が多忙で、基次郎が6歳の時に仕事を辞めた。宗太郎は勤勉であったが、酒色に溺れていた放蕩の人でもあった。

子ども時代は父の転勤と共に、東京、三重、京都などで暮らした。12歳の時に祖母を、14歳の時に弟の芳雄を結核で亡くした。1919年（大正7年）エンジニアを目指して三高に進んだが、文学に惹かれるようになり、頽廃的な生活を送り、肺結核になったが作家への道を志した。次第に学業への興味を失い、志賀直哉、谷崎潤一郎といった文学や音楽に傾倒していた。この頃友人への手紙に、「梶井潤二郎、梶井漱石」などとサインすることもあった。この間は「瀬山の話」「犬を売る露店」「雪の日」「母」などの習作を日記に書いた。1924年（大正13年）4月、東京帝国大学文学部英文科に入学。7月に3歳の異母妹・八重子が結核性脳膜炎で急逝。妹の死は梶井にいろいろ考えさせた。初七日が終わると自分で散歩した。「綴りの間違つた看板の様な都会の美」、「華やかな孤独」、「神経衰弱に非ざればある種の美が把握できないと思つてゐる」[1]などの心境を友人に宛てた手紙に語った。この頃血痰を吐いた。「基次郎は不安定で移ろいやすい感覚の状態の中、日常的な認識や過剰な自意識のひきおこす苛立ちから解き放たれたところで、感覚そのものを見つめ、楽しむことに次第に意識的になってゆく」[2]。1925年（大正14年）1月、同人誌『青空』を創刊。「檸檬」を発表。2月、「城のある町にて」を発表。春、創作を書きあぐね神経衰弱気味になった。7月、「泥濘」を発表。10月、「路上」を発表。11月、「橡の花」を発表。

1926年（大正15年）1月、「過古」を発表。6月、「雪後」を発表。7月、「川端康成第四短篇集「心中」を主題とせるヴァリエイシヨン」を発表。8月、「ある心の風景」を発表。病状が進み血痰を見た。「右肺尖に水泡音、左右肺尖に病竈あり」と診断された。9月に「Kの昇天」を書き上げ、10月、同人誌に発表。基次郎は卒業をあきらめて、昭和と元号が改まった12月、肺病を療養するために、川端康成のいる伊豆の湯ヶ島温泉に行った。

1927年（昭和2年)、湯本館に滞在中の川端の紹介で、旅館・湯川屋に移った。「冬の日」を執筆し、2月と4月に分けて発表。6月、『青空』廃刊（全28号)。10月、京大病院にて肺結核で来春まで静養を要すと診断され、湯ヶ島に戻った。

1928年（昭和3年）1月、熱海にいる川端を訪ねた後、上京した。同月末から、39度の熱が出た。この頃、ボードレールの『パリの憂鬱』の英訳の一部をノートに筆写した。3月、『文芸都市』に「蒼穹」を発表。一旦上京し、東京帝国大学文学部から除籍されて中退。4月、『近代風景』に「筧の話」を発表。5月、同誌に「器楽的幻覚」を発表。『創作月刊』には、「冬の蠅」を発表。文筆で立つ覚悟を固め、上京した。7月、「文藝都市」に「ある崖上の感情」を発表。8月、血痰が続き、熱は下らず。体が非常に弱かった。友人たちが帰阪を説得した。9月に、帰阪。病気は小康を得た。12月、『詩と詩論』に「桜の樹の下には」と「器楽的幻覚」を発表。

1929年（昭和4年）1月、父の宗太郎が心臓麻痺で没。行年60歳。基次郎はこれまでの自分の贅沢による両親への経済的負担を反省し、道徳的な呵責を痛感する。そのころから基次郎は新しい社会観の勉強に取り組み、マルクス『資本論』などの本を読んだ。血痰もあったが、体は次第に回復した。九月の初め、体調を崩した。12月、『詩集「戦争」』を『文学』に載せた。「この頃から基次郎は、客観的な社会的小説を書きたいと思うようになるが、それは流行のプロレタリア文学のようなものではなく、人々の生活の実態をとらえたものでなければならないという意気込みを見せた」[3]。1930年（昭和5年）1月、肺炎で正月を寝て暮らして、呼吸困難になった。ゴーリキー、レマルクなどを盛んに読んだ。2月、武田麟太郎の「ある除夜」に刺激されて、井原西鶴に興味を抱いた。6月、北川らの同人誌『詩・現実』創刊号に「愛撫」を発表。9月、同誌に「闇の繪巻」を発表。川端康成が読売新聞の文芸時評で「闇の絵巻」をほめて、梶井基次郎の名が文壇の一隅でようやく知られた。

1931年（昭和6年）1月、『作品』に「交尾」を発表。流感にかかり、高熱が続いた。5月、作品集『檸檬』が刊行された。9月、『作品』にプルースト「失われた時を求めて」の書評「「親近」と「拒絶」」を載せた。10月、発熱が続き、大阪の家に戻った。

1932年（昭和7年）1月、『中央公論』に「のんきな患者」を発表。2月、小林秀雄が『中央公論』で「のんきな患者」を佳作としてほめました。基次郎は病床で森鴎外の史伝に親しんだ。絶対安静の床で続稿を考えていたが、3月、様態悪化した。友人たちが見舞いに来た。17日、顔がはれ、決定的に死を悟った。23日、呼吸がいよいよ困難であったが、酸素吸入もきかなかった。夕方、意識が不明瞭に陥った。24日の午前2時、安らかに逝いた。31歳没。

（指導教員：大井田義彰教授）

注

1、梶井基次郎全集第三巻　宇賀康宛書簡　　筑摩書房　昭和41年6月

2、梶井基次郎 鈴木貞美 新潮社　昭和60年7月

3、梶井基次郎研究　古閑章　桜楓社　平成6年11月

参考文献

1、梶井基次郎全集　筑摩書房　昭和41年6月

2、評伝梶井基次郎　大谷晃一　河出書房新社　平成元年4月

3、wikipedia

志賀直哉の作品における死生観

―『城の崎にて』を中心に―

陳　伊蘭

1、はじめに

志賀直哉は日本近代文学の代表的な作家である。「小説の神様」と呼ばれている。白樺派の代表的な作家で、日本近現代文学史において重要な位置を占めている。昭和二十四年に彼は文化勲章を受賞した。志賀直哉の短編小説のなかで、「城の崎にて」（大正六年五月『白樺』）は一番よく知られた名作である。私は『城の崎にて』を読むまで、生と死は両極にあるものだと考えていた。ちょうどそれは東と西のように、南と北のように、ある一点から見たときに常に正反対に位置する存在だと思っていた。人々は東から西へ走っていくように、生まれた場所から一歩一歩段階を経て死に向かうだろう。しかし、『城の崎にて』を読むと「生きている事と死んでしまっている事と、それは両極ではなかった。それ程に差はないやうな気がする」と志賀は言っている。その瞬間は私の持っていた生と死のイメージは百八十度ひっくり返されたように感じた。不思議だと思っていた。

「小説」というフィクションのイメージが強いが、決してそれだけではない。「小説」という語は広辞苑第五版によると、「(坪内逍遥による novel の訳語）文学の一形式。作者の想像力によって構想し、または事実を脚色する叙事文学。(以下省略)」と定義されている。志賀の作品は、彼が体験したこと（事実）に志賀自身が感じたことを織り込み作品としてまとめている心境小説が多く。まさに「小説の神様」というに相応しい作家であろう。そんな志賀の心境小説を代表する作品の一つが『城の崎にて』である。「城の崎にて」について、志賀直哉は「創作余談」で「これも事実ありのままの小説である。鼠の死、蜂の死、蠑螈の死、皆その時数日間に実際目撃した事だつた。そしてそれらから受けた感じは素直に且つ正直に書けたつもりである。所謂心境小説といふものでも余裕から生まれた心境ではなかった」と書いている。それによって、作者志賀直哉の死生観は「城の崎にて」を通してはっきりと表れていると言えよう。

本稿では、まずこの短い作品（『小僧の神様・城の崎にて』昭和四十三年七月　新潮文庫によるもの）を忠実に読み取り、ついで作品を貫く死生観を摘出してみようと思う。

２、作者の体験

志賀直哉は大正二年四月に関西から東京していたが、同年八月に里見弴と芝浦へ涼みに行き、素人相撲を見て帰る途中、線路の側を歩いていて山手線の電車に後からはね飛ばされ重傷を負った。東京病院に暫く入院して助かったが、療養のために兵庫県にある城崎温泉を訪れた。城崎に赴いてから三年半後『城の崎にて』は書かれた。その事故は、『城の崎にて』の冒頭の「山の手線の電車に跳飛ばされて怪我をした、その後養生に、一人で但馬の城崎温泉へ出掛けた。」という言葉と照応している。 また「創作余談」の中では「電車

で怪我をし、しかも幸いに一生を得た。この偶然を面白く感じた。此怪我の後の気持ちを書いたのが『城の崎にて』である」と述べている。

また、大正二年十月三十一日の日記に「づっと上の方まで歩いていった。岩の上のやもり（イモリの間違いだろう）に石を投げたら丁度頭に当たって一寸尻尾を逆立って横へ這った切りでしんでしまった、（夕方の山道の流れのワキで）――これは次の日の夕方のことだった」とある。作品内容と伝記的事実とを同一視することが一応許されると思う。

３、蜂、鼠と蠑螈について

『城の崎にて』と言えば、蜂、鼠と蠑螈、この三種の小動物の死が作品の主な問題になる。主人公は三つの小動物の死を体験して、生と死に対するイメージが変わってきたと思う。ここからは、蜂、鼠と蠑螈それぞれの場面について詳しく見ていく。

ある朝、主人公は玄関の屋根で蜂の死骸を一匹見つけた。蜂の死骸について作者は次のように描いている。

> 足を腹の下にぴったりとつけ、触角はだらしなく顔へたれ下がっていた。他の蜂は一向に冷淡だった。巣の出入りに忙しくその傍を這いまわるが全く拘泥する様子はなかった。忙しく立働いている蜂は如何にも生きている物という感じを与えた。その傍に一疋、朝も昼も夕も、見るたびに一つ所に全く動かずに俯向きに転がっているのを見ると、それが又如何にも死んだものという感じを与えるのだ。それは三日程その儘になっていた。それは見ていて、如何にも静かな感じを与えた。淋しかった。他の蜂が皆巣へ入って仕舞った日暮、冷たい瓦の上に一つ残った死骸を見る事は淋しかった。然し、それは如何にも静かだった。

蜂についての描写では、「忙しく」「動く」と言う言葉が、「生の象徴」としての言葉となっていると言うことであろう。「死んだ蜂」と「生きている蜂」との対照的な描写は、運命のはかなさも感じさせる。 生きた蜂の活発と目の前にある死骸の静かさと淋しさ、このコントラストがあまりに極端な為、「生」と「死」が相反するものとして描かれているのである。ここで主人公は、「生」と「死」が正反対なのだという意識を持ったのではないだろうか。

次に鼠の場面について考えていく。蜂の死骸が消えて間もなく、主人公は鼠の足掻きを目撃した。

> 鼠は一生懸命に泳いで逃げようとする。鼠には首の所に七寸ばかりの魚串が刺し貫してあった。頭の上に三寸程、咽喉の下に三寸程それが出ている。鼠は石垣へ這上がろうとする。子供が二三人、四十位の車夫が一人、それへ石を投げる。却々当らない。カチッカチッと石垣に当って跳ね返った。見物人は大声で笑った。鼠は石垣の間に漸く前足をかけた。然し這入ろうとすると魚串が直ぐにつかえた。そして又水へ落ちる。鼠はどうかして助かろうとしている。顔の表情は人間にわからなかったが動作の表情

に、それが一生懸命である事がよくわかった。鼠は何処かへ逃げ込む事が出来れば助かると思っていた。

一生懸命に逃げようとする鼠の姿を見て主人公は死への恐怖を深めた。鼠の足掻きを見た主人公は「淋しい嫌な気持になった」。それは「死ぬ」までの「動騒」の苦しみが恐ろしいからであろう。この鼠の場面において「自分」は、電車事故当時の「自分」を、死を目前に必死に助かろうとしている「鼠」を通して追体験するのである。主人公は其光景を見て「死に到達するまでのああいう動騒は恐ろしい」と思うのであった。「自分にあの鼠のような事が起こったら自分はどうするだろう。自分は矢張り鼠と同じような努力をしてしまいか」と思う。主人公は電車事故のことを思い返した。「自分は出来るだけの事をしようとした。自分は自身で病院をきめた。それへ行く方法を指定した。若し医者が留守で、行って直ぐに手術の用意が出来ないと困ると思って電話を先にかけて貰う事などを頼んだ。半分意識を失った状態で、一番大切な事だけによく頭の働いた事は自分でも後から不思議に思った位である」と菊池寛は指摘して居る。死の直前の動騒を客観的に見たときは「淋しい嫌な気持」になり、それを「恐ろしい」と感じるが、その動騒はどんなに逃げようとしても必ず死の直前にはあるものなのだと諦観するのである。

自分は別に蠑螈を狙わなかった。狙ってもとても当らない程、狙って投げる事の下手な自分はそれが当る事などは全く考えなかった。（中略）自分はどうしたのかしら、と思って見ていた。最初石が当たったとは思わなかった。（中略）虫を殺す事をよくする自分であるが、其気が全くないのに殺して了ったのは自分に妙な嫌な気をさした。素より自分の仕た事ではあったが如何にも偶然だった。蠑螈にとっては全く不意な死であった。自分は暫く其処にしゃがんでいた。蠑螈と自分だけになったような心持がして蠑螈の身に自分がなって其心持を感じた。

主人公は「もうここらで引き返そう」と思っていたが、「何気なく傍の流れを見」ると「半畳敷程の石」の上に水から出ている蠑螈に気がついた。蠑螈は「未だ濡れていて、それはいい色をしていた」。その蠑螈にぜんぜん死の影が見えない。それから、主人公は「蠑螈を脅かして水に入れようと思っ」て踞んだまま、「小鞠程の石」を取り上げて投げてやった。別に蠑螈を殺そうと思っていないのに、石があたって蠑螈が不意に死んでしまうのである。殺意がないのに蠑螈を殺してしまったことに主人公は「妙な嫌な気」になる。その時の主人公の気持ちを取り上げて見よう。

「自分」は蠑螈の死について、「可哀想に想うと同時に、生き物の淋しさを一緒に感じた」。そして、自分の怪我と比べて、「自分は偶然に死ななかった。蠑螈は偶然に死んだ」と言って、「偶然」を強調し「淋しい気持」になった。これは「自分」が遭った電車事故に重ねって来る描写だと考える。「自分」も電車事故に遭おうと思って遭ったわけではない、それは偶然にも起こってしまったのである。幸運にも「自分」は死なずにすんだのである。しかし、「蠑螈」は偶然に殺された。主人公は、どの生き物にとっても「死」はいつでも訪れる

か分からない、ということを悟るのである。ここで主人公は、「生」と「死」の問題を切実に考えて、「死ななかった自分は今こうして歩いている。（中略）自分はそれに対して、感謝しなければ済まぬような気もした。然し実際喜びの感じは湧き上がっては来なかった。生きている事と死んでしまっている事と、それは両極ではなかった。それ程に差はないやうな気がする」と諦観した。今の「自分」が生きていることに感謝はするが、その命はまた蝮蝮のように、いつか何かによって偶然に奪われるかもしれないものであるので、「喜びの感じ」は起こらない。生きるか死ぬか、それは「偶然」によって決められるものである。主人公は、「生」と「死」を分けたのは単なる「偶然」にすぎないと思うようになった。そして、生きている無力感に捕らわれた。

４、おわりに

以上述べたように、『城の崎にて』では、主人公の「生」と「死」に対する思索はだんだん深くなった。これまで見た蜂、鼠、蝮蝮の場面から、「自分」の死と生に対するイメージが変化して居ることが分かった。最初は生と死を全く別なものと考えていたが、最後には生と死は紙一重なのであると考えるようになるのである。

『城の崎にて』は城崎に赴いてから三年半後書かれたのである。ところが事故の翌年にはその草稿と言われる『いのち』が書かれている。これからは草稿とテクスト比較して、作者の死生観の変遷について探っていきたい。

（指導教員：大井田義彰教授）

５、参考文献

高橋怜美　志賀文学と死生観――『城の崎にて』を中心に
『日本文学誌要第七八号』（二 00 八年七月）

長谷川明久　死の諸相――『城の崎にて』論　『教材研究』（一九九〇年三月）

新形信和　日本的死生観の典型――『城の崎にて』を読む
『愛知大学文学論叢』第七四巻（一九八四年一月）

日本人の思考を決定している死生観について―『城の崎にて』再考
『愛知大学文学論叢』第一一六巻（一九九八年二月）

文学散歩研究部会　志賀直哉研究　『城の崎にて』についての一考察
『研究部会年報』第四巻（一九六九年七月）

門倉正二　『城の崎にて』について　『国語展望』五八巻（一九八一年六月）

石川達三の〈戦前期〉・そのリアリズムの行方
―『蒼氓』・『日陰の村』・『生きてゐる兵隊』を中心に―

呉　恵升

はじめに

現在中国の日本文学研究会では、石川達三の『生きてゐる兵隊』や火野葦平の『麦と兵隊』などの中日戦争から太平洋戦争中の作品を対象とする研究が多くなった。私は大学院一年生の時、「小説の読み方」という授業で石川達三の『生きてゐる兵隊』や『武漢作戦』を読むようになり、石川文学に興味を持つようになった。それで、石川達三作品集（全２５巻、新潮社、1972.2-1974.2）を購入し、ほかの著作にも手を伸ばした。彼のデビュー作―芥川賞受賞作『蒼氓』を一読し、新潮文庫『蒼氓』（1951.12）の解説で山本健吉が、「近代日本文学の主流たる私小説の流れと違う〈はっきり新しい品種として〉達三は現れた」と書いているのを読んで、どういうふうに違っていたのかといった疑問を持ちながら、作品を読み続けてきた。

作品を読むおりに、石川達三の生い立ちについて検索をかけると、多彩な人生を送っていたものと感心した。長い文学修業時代を送っていて、移民船に乗ってブラジルへ行ったり、中国との戦争から引き続いての太平洋戦争の時代に、三回従軍したりした。そのたびにそれぞれ一作ずつをのこしている。全集を通読して、石川達三はいつも「現実を書く」態度で、リアリズムの手法で社会を取材し、重大な問題を提起し、批判精神を発揮させた作家であることを感じさせられた。

一、石川達三とその作品

久保田正文は「石川達三は、まぎれもない昭和の作家である。戦前から戦後にわたる半世紀を書きつぎ、その時代と社会とをさながらに反映した作家である。この作家の個性は、つねに民衆のいだく社会的な正義感の側に立ち、時代意識を確保しつつ、その手法においてルポルタージュあるいはドキュメンタリーの技術を先覚的にとりいれたところにある」[i]という見解のように、石川達三は社会派作家としてよく知られていて、その小説の多くが、時代と社会に対する作者の旺盛な関心に支えられて生み出されている。

石川達三の生涯（文学世界）について、『石川達三作品集』（全 25 巻）を参考に、以下のようにまとめた。

石川達三は、明治 38 年（1905 年）秋田県で生まれ、東京と岡山で育った。昭和 60 年（1985 年）死去。昭和 10 年（1935 年）までが習作時代で、岡山市の『山陽新報』にいくつか短編を掲載されていたが、同期生の平林たい子たちがたちまち文壇に認められて行ったのに対して、石川達三の無名時代が長いわけである。昭和のはじめ、早稲田大学を中退すると、移民船に同乗し、自らの体験をもとに、ブラジル移民の姿を『蒼氓』という小説に書いた。昭和 10 年に、移民の実態を赤裸々に描いた『蒼氓』で第一回芥川賞をうけて、当時三十歳の石川達三の文学生活は実質的に始まったわけである。「権力に対する庶民的な抵抗という姿勢は、ほとんど私の作家としての全生涯を通じて変わらなかった。世間の人々は知っておりながら黙っているような事、或はそういうものとあきらめているような事を、私は黙って居られなくて抗議しようとする。したがって私は常に野党的であった。私は少しばっ

かり臍曲りであり、文句たれであった」と石川達三が『経験的小説論』（文藝春秋、1970.5月刊）で自ら語っているように、『蒼氓』には石川文学を貫く基本的な性格がすべて盛り込まれており、作者の体験を生かしてリアルに描いたものである。『蒼氓』とほとんど並行しながら、作者は、さらに農村と農民の生活に関心があって、東京の水源地候補地としての小河内村を取り扱って、昭和12年（1937年）1月、村長から話を聞き、現地調査に数ヶ月を費やして一気に『日陰の村』を書き上げた。それはその年の九月に発表され、小河内村の惨めな結末を描いて、社会機構の冷酷さを告発した。

同じ年の12月、中央公論社特派員として中日戦争の取材に出かけて、この時の体験を生かして書いたのが、筆禍事件を起こした『生きてゐる兵隊』である。「『蒼氓』がすべて語っているが、リアリズムを信条とする自然主義文学系人生派といってもいい石川達三の記録文学的要素を多分取り入れた『生きてゐる兵隊』は、戦争がいかに非人間的な所業を人々（兵士）に強いるかを、これでもかこれでもかと暴きだす」。[ii]だが、この小説を掲載した「中央公論」1938年3月号は発売と同時に発禁処分となった。石川達三や編集長らが禁錮四ヶ月、執行猶予三年の刑事処分を受けた。作者が「あれは、昭和13年『生きてゐる兵隊』を『中央公論』に出して、発禁の上に起訴にまでなった。そうなるとジャーナリズムというものは冷たいもので、あいつは危いというので、誰もよりつかない。そこで公判を待つ間の空白時代に、書き下したのがあれだ」[iii]と語っているのが『結婚の生態』（新潮社、1938年11月刊）である。「私」と其志子の私的な新婚生活や筆禍事件以後の作者の実生活から取材している。でも、「当時の時代状況に自然に結びついて、社会小説の様相を呈してくるという構造を作品は持っている」。[iv]昭和13年9月中旬、再び中央公論社特派員として武漢作戦へ従軍し、11月に帰国した。この時の体験によって書かれた作品は「中央公論」昭和14年1月号に発表された『武漢作戦』である。特定な登場人物を設定するのではなく、分散的にして集中的な戦線の広がりを多角的にたどるという方法に従っている。昭和16年（1941年）12月太平洋戦争開戦直後陸軍に徴用され、のちに急に海軍徴用に変更され、海軍報道部の監督をうけた。

戦後の作者は長編小説に力をそそいで、社会派としていくつもベストセラーを生み出した。最初の長編著作は『風にそよぐ葦』（毎日新聞、1949-1951年）で、太平洋戦争勃発前後の多くの歴史的事件を描いている。『人間の壁』（朝日新聞、1957-1959年）は「佐賀事件」と言われる佐賀県教職員組合の労働争議、全県下の教師たちの休暇闘争を中心に置いて書いたものである。『傷だらけの山河』（新潮社、1964.2月刊）が経済領域内の種々の矛盾を反映していて、『金環蝕』（サンデー毎日、1966年）は政治の腐敗と政党内部の秘策を戦わせて互いに争い、他人を押し退けるやり方を暴露しているものである。

「私は何も自分の作品を社会の実用に供しようと思わないが、何の為に書き、何の為に読むのか、それを考えずには居られない。現実の、眼の前にある社会の、不正や危険や誤謬を、そのままに放ったらして居て、文章だけをどんなに飾ってみたところで、そんな文学はひま潰しに読むだけでいいだろうという気がする。また、私は社会の浮薄な流行が気になってならない。その傾向に対して警告を発し修正を要求したい。中国との戦争の初期に、あの戦争礼讃の危険を感じ『生きてゐる兵隊』を書き、戦後は軍人たちを敵のように非難する事のまちがいを修正したい気持ちから『望みなきに非ず』を書いた。戦後の好景気と開発ブームの中では『傷だらけの山河』を書き、道徳性崩壊の世相に対しては『青春

の蹉跌』を書いた。他人は何と見るかは解らないが、自分としては一つ一つが時代への警告であり世相との闘いであった。その闘いに私は作家としての生き甲斐を感じ、書くことの意味を感じていた」[v]と作者自身語っているように、石川達三はいつも時代を象徴する問題を小説のテーマとして取り上げ、その時代ごとに変わる様々な意見を批判的リアリズムの手法を用いて作品化してきた作家であることは明らかである。

二、主題設定の理由

昭和10年（1935）、石川達三は『蒼氓』で第一回芥川賞を受賞した。「『蒼氓』をもって石川達三があらわれたということは、ほとんど文学史的に象徴的な事件とでもいうべきであった。その方法はルポルタージュ的方法、あるいはかつて青野季吉が理論化した〈調べた芸術〉の方法をより積極的にとり容れてプロレタリア文学時代には到達しえなかった成功をおさめたものであった。」[vi]自分のブラジル移民経験を素材にした『蒼氓』は当時の移民世界をリアルに描いている。続いて『日陰の村』、『生きてゐる兵隊』を読んでいるうちに、〈調べた芸術〉やリアリズムがより一層見えてくるような気がした。『日陰の村』は十五年戦争下の日本の農村の実相を描いている。『生きてゐる兵隊』はあるがままの戦争の真実を描いているため、「筆禍事件」を起こした。彼の作品はどのように「リアリズム」を具現しているのかという問題を究明したい。また、戦前期のもう一つの作品『武漢作戦』を読んで前作品とずいぶん違っていて、当時の政府や軍部の見解と同じ立場から弁解していることに気がついた。その中に事実が書いてあったのか、どういうわけで「戦争協力」の道へ行ってしまったのか、批判的リアリズムの行方はどうなっていったのかなどの疑問が頭に浮かんできた。

なお、本論文の研究対象を範囲限定するために、戦前期の主なる三作『蒼氓』・『日陰の村』・『生きてゐる兵隊』を中心に、社会派作家石川達三におけるリアリズムの行方を考えてみたい。また、他のエッセイなどの関連作を参考にしながら、論証していきたいと考えている。

以上をもって、問題提起及びその経緯を述べてきた。次に、先行研究に言及したい。

三、先行研究

提起した問題を念頭において、日本側と中国側との先行研究を調べてみた。管見の限り、中国においては、石川達三についての研究はきわめて少ない、しかも彼のリアリズムの行方に関する研究ではない。雑誌等は『生きてゐる兵隊』に触れた文章はあるが、ほかの作品を考察するのは見当たらない。一方、日本側は石川達三文学に関する単行本は５冊ある。作家論は作家石川達三が現実とどう切り結んでいるかに焦点があてられ、論じられることが多い。作品論は『生きてゐる兵隊』『人間の壁』に集中している。しかも、賛否両論に分かれる場合が多い。

四、論文の構成―「目次」

はじめに
第一章　石川達三とその文学
　第一節　石川達三とその作品

第二節　問題提起
第三節　先行研究
第四節　研究目的及び研究方法
第二章　リアリズム小説の方法と『蒼氓』
第一節　「調べた芸術」と石川達三
第二節　『蒼氓』の世界
第三節　『蒼氓』の意味するもの、その思想
第三章　農村の実相を描く――『日陰の村』
第一節　一五年戦争下の日本の農村
第二節　取材と記述の間
第三節　資本主義体制（絶対主義天皇制）批判
第四章　戦争の〈真実〉を描く（１）――『生きてゐる兵隊』論
第一節　あるがままの戦争
第二節　作者の意図は何であったのか
第三節　筆禍事件
第五章　戦争の〈真実〉を描く（２）――『武漢作戦』から
第一節　『生きてゐる兵隊』から『武漢作戦』へ
第二節　『武漢作戦』の問題点
第三節　「戦争協力」への道
第六章　批判的リアリズムの行方
第一節　私的体験を小説へ
第二節　「生活」優先
第三節　批判的リアリズムの行方
終わりに

おわりに

本レポートは石川文学をしようとするきっかけ、その主題設定の理由及び中国側、日本側における先行研究を纏めてきた。それらをもとに、目次を作ってみた。ただ、〈戦前期〉しか触れないので、石川達三の作品全体に現れた「リアリズム」について十分に言及できない点もあり、今後の課題とする。

（指導教員：大井田義彰教授）

---

[i] 久保田正文　『新・石川達三論』　永田書房　1979 年 10 月 30 日
[ii] 黒古一夫　『戦争は文学にどう描かれているのか』　八朔社　2005 年 7 月
[iii] 中野好夫　『現代の作家』　岩波書店　1955 年
[iv] 池田純溢　「結婚の生態」　解釈と鑑賞　1976 年８月
[v]石川達三　「自己の文学を語る」　解釈と鑑賞　1976 年８月
[vi]久保田正文　『新・石川達三論』　永田書房　1979 年 10 月 30 日

参考文献
１、青木信雄　『石川達三研究』　双文社出版　2008 年 3 月 11 日
２、「特集・石川達三の世界−生誕百年」　解釈と鑑賞 70−４

安房直子のファンタジー物語の特質

王　珂

1、はじめに

日本では、今まで数多い安房直子の作品が出版されてきた。また、小中学校の教科書教材として取り上げられ、文壇で名声を馳せた作品も少なくない。まずは、私と安房直子との出会いを述べたい。学芸大学の図書館に児童教育に関しての本がたくさんあり、その中で絵本化された童話集に非常に惹かれた。私はもともと、児童文学、童話というものに興味がなかった。しかし、美しく描かれた絵に取りつかれ、次第に童話世界の魅力を感じたことになる。偶然に安房直子の童話集を見つけ、読んで驚いた。たしかにやさしい言葉で書いてあるが、これらの作品の持っている本質は、子供だけではなく大人にも通じていると思ったからである。この現代、どこに真実や善良さがあるのか、正しく生きるとはどういうことなのか、それらについて、誰でも一致点を見出すのは極めて難しいように思える。大人でもその価値観は信じられないほど多様化しており、子供がそのことをどこまで理解することができるのか、本当に把握しにくい問題と言えるのであろう。しかし、安房はその点に注目し、鋭い目で観察された人間の本質をすばらしい作品に明らかにしていた。私が安房直子の物語に魅了された理由はそれこそここにあるかと言ってもよい。しかし、中国において安房作品の翻訳及びその研究はまだ重要視されていないのである。中国では、ファンタジー物語に関しての研究歴史は短く、本格的なファンタジー物語も少ない。安房をめぐった研究は主に初期作品に集中した論で、系統的に安房ファンタジーの特徴をまとめたものがまだ出されない。そのため、安房研究には、まだ空白なところがあり、究明すべきものがたくさんあるのだと考える。

2、ファンタジーとは何か

現在、ファンタジーという言葉は様々なところで用いられている。ファンタジーとは何かということについては、それぞれの人が作品の創作や作品の分析を通してその定義を試みている。日本の『広辞苑』には、「①空想。幻想。白日夢。②幻想的な小説· 童話。③幻想曲」と書かれているが、中国の『現代中国語大辞典』には、「①非現実的な、根拠がない想像。②理想や願望に基づいて、まだ実現されない物事への想像」と述べられているが、イギリスの『オクスフォード中辞典』には、「知覚の対象を、心的に理解すること」または「想像力。現実に現れていないことを形に変える働き、力、また結果」と定義されているという。しかし、児童文学におけるファンタジーという言葉は共通概念として定着しているといえるのであろうか。リリアン· H· スミスの『児童文学論』によると、ファンタジーは、ギリシャ語のファンタシア（映像、想像の意）に由来し、もともとは「目に見えるようにすること」[1]を意味していた。日本における最も早い時期のファンタジー論としては、一九六〇年四月に刊行された『子ども文学』が挙げられている。その中でイギリス児童文学に造詣の深い石井桃子· 瀬田貞二· 渡辺茂男などがリリアン· H· スミスの理論に基づいて

ファンタジーのすばらしさを力説し、「児童文学でファンタジーという場合、非現実を取り扱いながら、目に見える、具体的な、一つの世界をつくりあげている物語」[2]と述べている。

以上の様々の論述に基づいて、ファンタジーというものを以下のようにまとめたい。児童文学におけるファンタジーはもう一種のジャンルと認められているが、その範囲を確定することはまだ曖昧であるといわざるをえない。しかし、ファンタジー物語の共通点は超自然的なあるいは非現実な要素を目に見えるように再現されるものだと考えられる。ファンタジーの領域に、作者が豊富の想像力と抜群な創作力を持つのはもちろん、読者にも自分の想像力を十分に動かすのも必要なのだ。換言すれば、読者はファンタジー物語のしきたりや特徴を納得した上で、ファンタジーのすばらしさを体験できると言ってもまちがいない。それゆえに、読者としてファンタジーというものの特徴をとらえる必要がある。

3、安房ファンタジーの特質

3.1 ファンタジーの特質及び安房ファンタジーの異彩

日本で現代ファンタジーの出発とされる『だれも知らない小さな国』を初めとして、現在も数々のファンタジーを書き続けている佐藤さとるは作家の立場から、ファンタジーの特質を次のように述べている。①ファンタジーの多くは二次元性の物語世界を持っている。②ファンタジーの登場人物は、内面世界を持った個性として描かれる。この点でリアリズムの申し子と言える。③ファンタジーは一人の作家の心の中（内面世界）にはいりこんでいる物語る形式。[3]これはファンタジー物語の真髄に切り込んだとでもいうべき理論であろうか。そこで、様々な種類のファンタジー作品が流行っている現代にあって、安房のファンタジー物語はどのような世界を築いているのか。

安房の作品には、現実世界と異世界との、二つの大きな世界が交流しあうといった物語が多い。また、そのファンタジーの世界は繊細で瑞々しい感受性に溢れ、しかも単なる空想物語ではなく、しっかりとした現実認識に基づいたものである。安房の場合は、現実世界と非現実世界をつなぐものは、人のさまざまな想いである。心理的アプローチを多用し、読者が作品世界に共感できるように作品を描いていくのである。作中に貧困、孤独、別離といった現実の不幸をありのままの姿で反映され、そのような現実にある主人公たちが異世界に誘われ、慰めやぬくもりをもらったという心温まる物語が私たち読者に安堵の喜びを与えてくれた。作中に溢れたいつわりのない感情であるがゆえに、読者はそれに納得し、深く共感するようになる。またその想像は決して日常生活から離れているのではなく、私たちの身近なところから出発しているのである。とにかく、甘美な幻想世界の底に潜む鋭い人間探究は、読者の心に静かに響く。つぎは、気になった作品を通して、安房ファンタジーの特質を更に究明したい。

3.2 「きつねの窓」を中心に

私が特に心ひかれたのは「きつねの窓」という作品である。両手の親指と人差し指を桔

梗の花で青色に染め、その四本の青い指でひしがたの窓を作り、その指をのぞくと昔懐かしい人や風景が見えるという。安房は「きつねの窓」の執筆動機として「「きつねの窓」」を書いたころ、（そして今もやっぱりそうですが）私は青い色にとても惹かれていました。（中略）私に、「きつねの窓」を書かせたのは、いちめんの、青い花畑でした」[4] と述べている。このように「きつねの窓」の色彩イメージは青である。一般的には青とはどのようなイメージを与える色なのであろうか。青は光の三原色のひとつで、〈寒色〉のひとつとも思われる。おそらく絵本を描く際に、青には寒さや冷たさ、不安の意味を込めて使う。同様にこの作品で不安や恐怖といった感情もイメージされるかもしれない。しかしその一方で、青にはこのようなマイナス的なイメージの他に、すがすがしさ、清潔さ、安堵などのプラス的なイメージもあるであろう。そのため、「青いききょうの花畑」が出現した際に、「ぼく」はほんの一瞬ためらっても、直後にききょうの花畑に誘い込まれている。このように徐々に非現実世界を構築し、主人公を導いていくのが青の役割である。

しかも文章に「そう」、「ああ」という感動詞、「なんだか」、「いったい」という副詞などの日常会話に使われている言葉が多く出現している。「なんだか」というきわめて感性豊かな言葉は五回も使用される。①すると、地面も、なんだか、うっすらと青いのでした。②その景色は、あんまり美しすぎました。なんだか、そらおそろしいほどに。③このままひきかえすなんて、なんだかもったいなさすぎます。④なんだか悲しい話になってきたと思いながら、ぼくは、うんうんと、うなずきました。⑤ふーと、大きなため息をついて、ぼくは両手をおろしました。なんだか、とてもせつなくなりました。①の場面について、萬屋秀雄氏は「まだ不思議は起きていない。次の場面へ移行するためのステップである」[5] と述べているが、実に「ぼく」の感覚によって、すでに非現実の世界へ入るのであろうか。「空がとてもまぶしい」という印象は不思議なことではなく、「青」が地面まで浸透することは現実にありえない現象である。そして、②と③の場面は青いききょうの花畑になっている。おそろしくもありながらどこかしら心地よいという相矛盾する気持ちのままでさらに非現実の世界に取りつかれる。④と⑤の場面は青い指で作られた窓の中の風景になっている。それ自身の中に、「子ぎつね」に対する共感、過去の追憶の切なさ、はかなさ、断絶感、喪失感をも含むものへと微妙に変化している。以上のように、非現実世界への移動は全部「ぼく」の内部感覚によって実現され、具体的な外部からの道具は使われない。その入り口がはっきりしない点に特徴がある。

人は誰しも大切な思い出を持っているものである。普段は忘れているが、心の片隅にその思い出は残っている。もう実際に手にすることのできない品々、会うことのできない人々を思い出すことは辛いことかもしれない。しかし寂しさと同時に、そういうものを確かに持っていたという確信は、その人を慰めもし、励ましもするのであろう。過去をしっかりと見据えながら、未来へと踏み出していく強さがこの作品にはあるのではないであろうか。

3.3 「天の鹿」を中心に

「天の鹿」は安房直子の作品では中期作品に含まれ、一九七九年九月に筑摩書房より出版された。簡単にその内容を紹介していく。鹿撃ちの名人といわれる猟師の清十さんは、ものをしゃべるふしぎな鹿に出会い、不思議な鹿の市につれられていくというところから話がはじまる。清十は牡鹿から金貨一枚をもらい、紫水晶の首飾りを買っていくことになる。清十には三人の娘がいり、三人の娘たちは順々に牡鹿に誘い出され、鹿の市に案内されることになる。しかし、上の娘のたえも、中の娘のあやも、この牡鹿と心が通じ合うことがない。一番下の娘のみゆきは、純粋で、昔牡鹿のキモを食べさせられ、牡鹿とは心が通じ合っていた。最後に、牡鹿は、心やさしい娘みゆきを得て、ともに天にのぼっていったのである。この「天の鹿」の主題は死及び死者の交流といったものだと思われる。牡鹿は中の娘のあやを現実世界に帰らせる途中で、生きた鹿の群れに出会い、切ない気持ちが伝わってくる。生の国にも成仏の国にも行けずに、さまよっている牡鹿の苦しさが読者の胸にはっきり印象付けられる。みゆきのやさしい言動は牡鹿の心を温め、牡鹿とのやわらかなやりとりが二人の孤独を救ってしまった。作者の逝去したものへの悼みや再会への願いが作中に込められている。人間の生と死という主題は日本及び世界の児童文学におけるほかの題材と比べ、一種のタブーとしてあまり扱われない。安房はこの厳粛でありながら自然な現象を見つめ、あえて挑戦している数少ない児童文学作家の一人ということができる。ファンタジーの手法を通して、陰々滅々な雰囲気の底流に淡いぬくもりが漂っている。人間における生と死の問題、やむを得ず親しい人との別離、もう二度と会わない人とへの追憶などのものが多く安房作品の主題として描かれる。主人公は別の世界に行ってゆき、それぞれに不思議な出会いを体験し、最後に深い感情の絆で救済を取りつける。

4、おわりに

日本の児童文学史上において、安房直子はあまり有名ではない作家である。しかし、青色が大好きな安房は道端の青い花が大地にしっかり根付き、ひっそりと花を咲かせているように、黙々と自分の世界を築いている。読者は思わずにこの甘美な世界に魅了させ、様々の不思議な風景にうっとりとみとれている。今回の研究によって、安房作品の魅力の一端を明らかにすることができたのではないであろうか。これからもほかの物語をとりあげ、一歩進んで安房直子のファンタジー物語の特質をさぐってみたい。

（指導教員：大井田義彰教授）

注：

1　リリアン· H· スミス『児童文学論』石井桃子など共訳　岩波書店一九六四年　四月

2　石井桃子· いぬいとみこ· 鈴木晋一· 瀬田貞二· 松居直· 渡辺茂男共著『子ども文学』福晋館書店　一九六七年　二〇七頁

3　佐藤さとる　『ファンタジーの世界』　講談社現代新書　一九七八年八月　七〇頁

4　安房直子「惹かれる色」『安房直子コレクション１』偕成社二〇〇四年四月　三〇五頁

5　萬屋秀雄「安房直子の空想物語についての一考察―――『きつねの窓』『鳥』を中心に」『児童文学研究』一九七九年九月　九頁

小川未明の童話作品における「調和」意識を見る

何　麗欽

一、研究動機と意義

世界で一番すばらしい童話作家は誰かという問題を聞いたら、おそらく『人魚姫』の作者としてのアンデルセンだと思う。日本の児童文学で、小川未明が近代児童文学の先駆者として、代表作品の一つは『赤いろうそくと人魚』で、「日本のアンデルセン」という美称が与えられたことがあった。未明は、日本児童文学史上における象徴的な存在であると思う。彼は日本で世代を超えて最も愛読されている童話作家の一人である。小川未明は 1882 年 8 月に新潟県の上越市に生まれ、79 歳で亡くなった。彼は明治、大正、昭和三つの時代に渡って、30 年余の文学活動を続け、残した作品が多くて、約八百篇近くの童話を残し、多産の作家だと言える。小川未明の童話作品は子供の心だけでなく、大人たちの心も引いた。大学の時に、中国語訳の『赤いろうそくと人魚』（中国題「红蜡烛和人鱼」）を読み、とても面白かったと思う。それを初めとして、小川未明の日本語版の他の作品を読むようになった。彼の作品を読んでいるうちに、登場人物は境遇が違っているが、守りたい夢があって、絶えずに努力することは印象的である。そして、作品の中に描かれた人物は作家の経歴や思想などとどんな繋がりがあるのか、これについて興味を持つようになった。これらの疑問を契機として、私は小川未明の代表的な作品について深く研究することにした。

現在、日本では、小川未明及びその文学に関する研究論文と著書は、量的にも、質的にも多くの成果が上げられている。しかし、残念なことに、中国においては、未明文学に関する研究はまだ多くないのである。それのみならず、未明とその童話作品を知る人も数多くない。小川未明は五十年間の創作生涯の中で、たくさんの童話を書いて、時期によって、前期と後期に分けられているが、彼の童話作品は時期によって、独特な特徴があると思う。だから、前期も後期もともに、たくさんの人に愛読されていると思う。

小川未明の童話の代表作としては、『赤いろうそくと人魚』、『金の輪』、『野ばら』や『牛女』などがある。彼の童話作品では、現実な世界と超現実な世界を舞台として、彼のロマンチック風を合わせて、「調和」意識を表したと思う。未明の童話作品は教訓性よりも、むしろ、詩情、ロマンチック、ヒューマニズムなどを表現した作品が多くて、非人間な主人公といった異世界なものがよく題材とされる。また、未明が人間特有のエゴイズムを描写し、都会文明を批判するという主題をとりあげる作品のあるし、これにより自我犠牲や他人に愛情を持つというような行為もある。だから、本論文が小川未明の童話作品を分析して、彼の「調和」意識を述べたいことは意義がある。

二、先行研究

私の知っている限り、中国では、小川未明について研究が少ない。具体的に言えば、中国知網で、直接的に小川未明に関する資料はあまり多くないのである。しかし、小川未明童話は中国語に翻訳されて、『小川未明童話集』を出版することがある。また、中国で、上海の前進出版社は菅忠道『日本の児童文学』を出版したことがあるし、四川少年児童出版社は出版した上笙一郎の『児童文学引論』など本もある。

日本語版の修士論文は三つある。

１、「小川未明童話のネガティブなメロディーに関する考察」　孫大青　南京大学
２、「小川未明童話における明と暗」　　卜小恬　吉林大学
３、「小川未明童話と中国児童文学：研究と啓発」　趙浄浄　中国海洋大学

中国語版の論文の資料は五つがある。

１、小川未明童話の老人像について　　李迎春　≪芒種≫（2013 年 24 期）
２、小川未明童話の母権意識に関する　丁晨曦　≪安徽文学≫（2011 年 03 期）
３、小川未明童話「赤い蝋燭と人魚」を分析する　李真　≪科学消息≫　（2010 年 31 期）
４、小川未明を見つける　　彭懿　≪少年文芸≫（2006 年 09 期）
５、小川未明―日本のアンデルセン　　劉光宇　≪日本学論壇≫　（2000 年 02 期）

一方日本では、小川未明について研究者は多いである。論文の資料は一部だけ挙げている。

単行本：

１、『小川未明童話研究』　船木枳郎著　（東京：宝文館,1954.2）
２、『未明童話の本質：「赤い蝋燭と人魚」の研究』上笙一郎著　（東京：勁草書房,1966.8）
３、『小川未明童話研究』　船木枳郎著　（東京：日本図書センター,1990.1）
４、『「赤いろうそくと人魚」をつくった小川未明』岡上鈴江著（東京:ゆまに書房, 1998.4）
５、『名作童話を読む未明・賢治・南吉』　宮川健郎編著　（東京：春陽堂書店,2010.5 ）
６、『戦時児童文学論：小川未明、浜田広介、坪田譲治に沿って』　山中恒著　（東京：大月書店, 2010.11）
７、近代作家研究叢書 136　『小川未明論集』　長谷川泉/監修　（東京：日本図書センター　1993 年 06 月）
８、近代作家研究叢書　83　『小川未明童話研究』　吉田精一/監修　（東京：日本図書センター　1990 年 01 月）
９、『定本小川未明小説全集６　評論・感想集』　小川未明　（東京：講談社 1979 年）
１０、『子どもの本の魅力―小川未明から安房直子まで』　岡田純也　（名古屋：KTC 中央出版 1992 年 09 月）
１１、『小川未明 / 砂田弘編集・評伝；久世光彦エッセイ』　砂田弘　久世光彦（東京：新潮社　1996.3）
１２、小川未明 . 浜田広介 / 畠山兆子著 . 竹内オサム著.（永田印刷, 2014.3）
１３、解説小川未明童話集 45 / 小埜裕二編著　（北越出版, 2012.3）

論文

１、小川未明「赤い蝋燭と人魚」論―母人魚の恨みという枠組みをこえて　星野絢子　国文白百合　2011.3
２、小川未明「野薔薇」　太田晶子　書誌調査　1990.06
３、研究ノート　『赤い蝋燭と人魚』をめぐる考察　三浦正雄　近代文学研究　2011.04
４、『野ばら』と『一つの花』について　原国人　中京国文学　1988.03
５、小川未明童話研究―〈異界〉との交流の見地から　厚美尚子　児童文学研究 2002.10

６、小川未明童話にみる母親像　高橋依子　女子教育　1990.04
７、小川未明の幼年童話試論―結末部に見る明・暗と教訓　大藤幹夫　学大国文　1999.02
８、小川未明「赤い蝋燭と人魚」論―伝承説話の影響と創作的付加をめぐって　　堀畑真紀子　国語国文学研究　2000.02
９、小川未明童話の評価について―「牛女」における蝙蝠をてがかりに　成実朋子　国語と教育（大阪教育大学）2002.03

三、研究目標

本論文は小川未明の童話作品を分析して、彼の「調和」意識とその根源を分析して明らかにしたいと思う。

四、 研究内容

本論文は六つの部分に分けられると思う。第一章　小川未明という作家である。この一章は作家概況、先行研究、本稿の目的と方法を書く。第二章　小川未明の作品の詩情から発する「調和」意識――人間の人情についてことである。この一章は『牛女』、『赤いろうそくと人魚』、『野ばら』などの作品を分析して、作品の背景の設定における小川未明の作品の詩情から発する登場人物の間で、異状態な感情を説明する。第三章　小川未明の作品のヒューマニズムから発する「調和」意識――不調和な子供の成長に関することである。この一章は『赤いろうそくと人魚』や『牛女』や『金の輪』などの作品を分析して、子供の成長に関することを説明する。第四章　小川未明の作品のリアリズムから発する「調和」意識――戦争意識についてことである。この一章は『野ばら』という作品を分析して、小川未明の戦争観とあわせて、作者の戦争意識を述べる。第五章　小川未明の作品の「調和」意識を保つ――神秘な力と永遠への憧憬に関することである。この一章は『赤いろうそくと人魚』、『牛女』『金の輪』、『野ばら』などの作品を分析して、四つの方面から登場人物が自分なりな救済を求める思想や方法を述べたいである。第六章　小川未明の「調和」意識はどこから生まれてくるのかということである。この部分では、作者自身の経歴や思想から作者の「調和」意識の根源と理由を分析する。

五、研究方法

本論文はテキストを読んで、帰納法、弁証法及び対照法の方法によって、小論を展開し、研究の目的を達成しようとする。

具体的な方法というと、まず小川未明の童話を深く読み、登場人物の背景や特徴などを見出す。また作品と参考資料によって本論文の論点を証明する。そして小川未明の童話作品における「調和」意識を三つの方面を分けて、詳しく分析して小川未明の「調和」意識の意味とそのような観点を形成する理由を述べたいのである。

六、研究の新しさ

日本では、普通の読者のほかに、現在、小川未明童話を研究する学者もいることが分かった。小川未明の童話作品における全体として分析する論文や単行文ものが多いのである。しかし、小川未明の童話作品のロマンチック風と「調和」意識のつながりについての研究

が依然として少ない。特にわが国では、小川未明の童話があまり知られていない。中国では小川未明をめぐる論文の数はかなり少ないと言えるほどである。本論文は先行研究の上に、小川未明の童話の登場人物の特徴や童話の設置などを分析して、作者のロマンチック風の中の「調和」意識を究明したいことは本論文の新しさである。そして、その基礎をもとして、小川未明の「調和」意識とその理由を検討することは本論文の特色である。

目次

小川未明の童話作品における「調和」意識を見る

要旨
キーワード
はじめに
第一章　小川未明という作家
　第一節　作家概況
　第二節　先行研究
　第三節　本稿の目的と方法
第二章　小川未明の作品の詩情から発する「調和」意識――主人公の間の感情について
　第一節　『赤いろうそくと人魚』――母親から子供へ愛情
　第二節　『牛女』――母親の愛情を寄せられる子供
　第三節　『野ばら』――仲間と敵の変化
第三章　小川未明の作品のヒューマニズムから発する「調和」意識――子供の成長に関する
　第一節『赤いろうそくと人魚』――－孤独な母人魚と娘人魚
　第二節『牛女』――子母の愛憎劇
　第三節『金の輪』――無邪気な子供と金色な輪
第四章　小川未明の作品のリアリズムから発する「調和」意識――戦争意識について
　第一節　『野ばら』――現実の受容・逃避・沈黙と自我犠牲
第五章　小川未明の作品の「調和」意識を保つ――神秘な力と永遠への憧憬に関する
　第一節　『赤いろうそくと人魚』――義憤と復仇
　第二節　『牛女』――死と神秘の世界
　第三節　『金の輪』――霊魂の不滅と永遠への憧憬
　第四節　『野ばら』――コスモスの世界
第六章　小川未明の「調和」意識はどこから生まれてくるのか
　第一節　小川未明の経歴
　第二節　小川未明の思想
終わりに
参考文献
謝辞
作品の背景について

（指導教員：大井田義彰教授）

東アジア教員養成国際コンソーシアム学生相互交流プログラム（受入れ）

【東アジアプログラム必修科目】

2013 年度秋学期

①留学生科目「東アジアの教育と文化」（30 時間／2 単位）

〔概要〕

東アジア地域の教育と教師に関する基本的な事項について学修を進め、あわせて日本人研究者から見た「東アジア」について、多様な専門研究の方法との関連から理解を深め、各自の研究を支える基礎とする。

〔担当教員〕東アジア教員養成国際コンソーシアム事業実施部会（オムニバス形式）

下田誠・岩田康之「オリエンテーション」（第 1 回）

岩田康之「東アジア地域における教育改革と教師像」（第 2 回／第 3 回／第 4 回）

下田　誠「前近代東アジアの歴史世界」（第 5 回／第 6 回）

岸　　学「日本の教育評価と教育測定」（第 7 回／第 8 回）

佐藤千津「国際的な視野から各国・地域の教育比較」（第 9 回／第 10 回）

藤井健志「近代日本における宗教と教育の関係」（第 11 回／第 12 回）

②留学生科目「東アジア教師論演習」（30 時間／2 単位）

〔概要〕

東アジア地域の教師像に対する学修を進める中で、自国と他地域の制度設計の違いや歴史的展開、その特色、教師像の共通性と相違点について理解を深める。

〔担当教員〕岩田康之・下田誠

2014 年度春学期

③留学生科目「東アジア教育演習」（30 時間／2 単位）

〔概要〕

本演習では受講者が各自の研究テーマに即して発表をおこない、参加者との議論を通じて、最終報告会に向けた準備を進める。

報告者は前年度までの東アジア地域の教育と教師に関する知見や日本人研究者の東アジア研究の成果を踏まえ、各自の研究の水準を高めることが求められる。

〔担当教員〕岩田康之・下田誠

【東アジアプログラム彙報】

2013 年 10 月 2 日（水）13:00～15:00　　開講式　S101 教室

2014 年 3 月 30 日（日）・31 日（月）　　春合宿　ホテルラヴィエ川良（伊東温泉）

2014 年 7 月 31 日（木）13:00～17:00　　研究報告会・閉講式　N313 教室

東アジア教員養成国際コンソーシアム学生相互交流プログラム（受入）奨学金支給者名簿

（JASSO 日本学生支援機構平成２５年度留学生交流支援制度（短期受入れ）採択課題）

学年	氏名	ローマ字名	専門分野	所属大学	留学期間	国籍	指導教授
修士2年	李　連姫	LI LIANJI	幼児教育	北京師範大学	2013 年 10 月 2014 年 8 月	中国	伊藤　良子（教職大学院）
修士2年	張　其煒	ZHANG QIWEI	比較教育学	北京師範大学	2013 年 10 月 2014 年 8 月	中国	岸　学（教育心理学講座）
修士2年	高　彦穎	GAO YANYING	中日教育比較	上海師範大学	2013 年 10 月 2014 年 9 月	中国	岩田　康之 （教員養成カリキュラム開発研究センター）
修士2年	薛　白	XUE BAI	比較教育学	南京師範大学	2013 年 10 月 2014 年 9 月	中国	岩田　康之 （教員養成カリキュラム開発研究センター）
学部4年	黄　恵真	HYEJIN HWANG	中国語	公州大学校	2013 年 10 月 2014 年 9 月	韓国	下田　誠（国際戦略推進本部） →岡　智之（留学生センター）
学部4年	李　今朱	LEE KEUMJOO	光工学・物理教育	公州大学校	2013 年 10 月 2014 年 9 月	韓国	植松　晴子（基礎自然科学講座）
学部3年	洪　廷玟	HONG JUNG MIN	芸術教育	ソウル教育大学校	2013 年 10 月 2014 年 8 月	韓国	正木　賢一（美術・書道講座）
学部3年	徐　瑶	XU YAO	日本語	華中師範大学	2013 年 10 月 2014 年 9 月	中国	和田　正人（教育実践研究支援センター） →長谷川　正（基礎自然科学講座）
修士2年	蘇　芸	SU YUN	日本語日本文学	華中師範大学	2013 年 10 月 2014 年 9 月	中国	大井田義彰（日本語・日本文学研究講座）
修士2年	陳　伊蘭	CHEN YILAN	日本語日本文学	華中師範大学	2013 年 10 月 2014 年 9 月	中国	大井田義彰（日本語・日本文学研究講座）
修士2年	呉　恵升	WU HUISHENG	日本語日本文学	華中師範大学	2013 年 10 月 2014 年 9 月	中国	大井田義彰（日本語・日本文学研究講座）
修士2年	王　珂	WANG KE	日本文学	華中師範大学	2013 年 10 月 2014 年 8 月	中国	大井田義彰（日本語・日本文学研究講座）
修士2年	何　麗欽	HE LIQIN	日本文学	華中師範大学	2013 年 10 月 2014 年 9 月	中国	大井田義彰（日本語・日本文学研究講座）

東アジア教員養成プログラム

下田　誠先生

岩田 康之先生

高彦穎

蘇　芸

陳伊蘭

黄恵真

王　珂

張其煒

何麗欽

薛　白

呉恵升

李　連姫

洪廷玟

李今朱

徐　瑶

お わ り に

日本学生支援機構（JASSO）の短期留学に関わるようになって 4 年目になる。私は 2011 年度（平成 23 年度）に東京学芸大学の国際戦略推進本部に着任し、最初の仕事は「平成２３年度留学生交流支援制度（ショートステイ・ショートビジット）説明会」の傍聴だった。当時の JASSO 側の説明によれば、日本は 2020 年度までに 30 万人の留学生を受け入れるとし（所謂「留学生 30 万人計画」）、それを後押しする３ヶ月未満のショートステイ・ショートビジット（略称 SSSV）が始まったという。

それまで、学芸大で短期留学といえば、ISEP（International Student Exchange Program）のことを指していた。すでに 15 年近い歴史がある。私の着任の頃から重視されてきたのは、プログラムの特色である。単なる語学研修では採択されない、また単位認定は必須であるという。その後、私なりに学内の教員の応募と採択に向けた基盤整備・支援をおこなってきたつもりである。

そうした中、私の担当する東アジア教員養成国際コンソーシアム事業を中心に学生交流プログラムを応募しようと考えたのは、本事業が 2012 年度（平成 24 年度）より博士課程学生交流パイロットプログラムを開始したことによる。2011 年度より本事業は第２フェーズに入り、文部科学省の特別経費の支援を受け「東アジアの大学における教員養成のプログラム設計と質保証制度の現状と展望に関する国際共同研究」を推進している。そして最終年度となる 2014 年度（平成 26 年度）にはその国際共同研究の成果に基づき、国際大学院プログラムを策定するとしている。

確かに、今回「平成 25 年度東アジア教員養成国際コンソーシアム学生相互交流プログラム」によって来日した 13 名の中国・韓国からの学生はプレ「国際大学院プログラム」に参加していた。私たちもまた模索の中にあった当該プログラムに、彼女ら・彼らが実質を与えてくれた。

今回参加した 13 名の学生は、それぞれ専門は異なるとはいえ、同じく教育系・教員養成系大学・学部に学ぶものとして、東アジア地域の教師像や教師教育について理解を深めた。東アジア地域の教育の質向上は喫緊の課題であり、それを私たちは国際的な高等教育機関の連携・協力関係によって、質保証をはかる方途を検討している。

一「担任教員」としては、この１年間の学生たちの成長は目を見張るものであった。昨年（2013 年）7～8 月の選考段階、10 月の来日の頃、私もまた不安で一杯だった。一人一人が指導教授のもとで勉学に励み、「東アジア必修科目」や年間 14 科目を受講し、またそれぞれのゼミやサークルで学生と交流し、さらに国際課の職員、地域の人びとに支えられ、ここまで来た成果である。

これで閉講するのかと思うと私も寂しい気持ちである。月並みであるが、あっという間の１年だった。学生の諸君には、この学芸大での１年間を糧に、ますますの飛躍を期待している。そして、困ったときには（いや困らなくても）いつでも連絡してほしい。

東京学芸大学教員養成開発連携センター
下田　誠

2013 年 10 月～2014 年 9 月
東アジア教員養成国際コンソーシアム学生相互交流プログラム『研修レポート集』
日本学生支援機構　平成２５年度留学生交流支援制度（短期受入れ）採択課題

２０１４年７月３０日　発行

編　　者：東京学芸大学国際戦略推進本部
　　東アジア教員養成国際コンソーシアム事業実施部会
編集担当：下田誠（教員養成開発連携センター准教授）
　　〒184-8501　東京都小金井市貫井北町 4-1-1
　　東京学芸大学国際課・短期留学係
　　Tel：042-329-7728　　Fax：042-329-7765
印　　刷：有限会社　サンプロセス
　　〒207-0012　東大和市新堀 1-1435-29
　　Tel：042-561-8810　　Fax：042-561-8813